

## 自明性と証明：或いはモノとコトの世界における 証明の機能について

著者	長谷川 晃
雑誌名	東京水産大学論集
巻	34
ページ	89-126
発行年	1999-03-29
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1342/00000163/">http://id.nii.ac.jp/1342/00000163/</a>

## 自明性と証明

—或いはモノとコトの世界における証明の機能について—

長谷川 晃

### SELBST VERSTÄNDLICHKEIT UND BEWEIS

Akira Hasegawa\*

(Received August 31, 1998)

Die Welt des MONO und KOTO weiss nicht den Beweis wie Deduktion und Induktion im eigentlichen Sinne. Der Grund dafür liegt darin, dass diese Welt ihre eigentümliche Selbstverständlichkeit vom Beweisproblem hat. Um diese Selbstverständlichkeit zu erläutern, betrachten wir zwei Grundtypen von Aussage: nämlich KOTO-Satz und MONO-Satz. Im Gesichtspunkt der Modi der Gegebenheiten, hat KOTO-Satz den Charakter vom Aufgehen. Im Gegenteil hat MONO-Satz den Charakter vom Entgehen. Im Gesichtspunkt der Ontologie, entspricht MONO-Satz dem "An-sich" vom KOTO-Satz und KOTO-Satz dem "An-sich" vom MONO-Satz, so zu sagen. Dieses "An-sich"(SONO-MONO) ist im MONO-Satz als wissenschaftliche Redeweise in dieser kreisförmigen Welt vom MONO und KOTO, ausgedrückt und zwar in der Weise der Gegebenheit des Entgehens. Der "Beweis" in dieser Welt wird gemacht darum, dieses Entgehen-charakter zum Aufgehencharakter vom KOTO-Satz zurückzuschieben. Es scheint, dass diese Leistung des "Beweises" eine Art von Induktion ist. In der Tat aber, ist sie Analytisches vielmehr, weil der Sinn des MONO-Satzes erst durch dieses "An-sich"(SONO-MONO) gegeben wird und dieses "An-sich"(SONO-MONO) genau das "An-sich" von diesem aufgehenden sinngebenden KOTO-Satz ist. Dieses "An-sich"(SONO-MONO) entfaltet sich als die individuelle Allgemeinheit, so zu sagen, im MONO und KOTO haften deiktischen Sinnesfeld.

(はじめに)

私は自明性という主題をめぐるこの一連の思考を『自明性という手掛かりについての予備的考察』<sup>1)</sup>なる小論から始めて『モノとコトの自明性』<sup>2)</sup>『「トシテ」考』<sup>3)</sup>をめぐり『明るさとしての暗さ』<sup>4)</sup>へとたどってきた。最後の『明るさとしての暗さ』は焦点を「事実性としてのコト」と称する現象に絞ることになった。これは文の形に繰り広げて言えば「,, , ガ,, (する) コト」という定式によって一般化できるコトでありながら, しかも, 言葉としてのコトの圏域に限られることは無く, 「事実性というコトそのモノ」と

\* Interdisciplinary Studies, Tokyo University of Fisheries, 5-7 Konan 4-chome Minato-ku, Tokyo 108-8477, Japan (東京水産大学共通講座)

いう表現も単なる名辞化や客体的対象措定としてではなく成り立つコトでもあり、したがって無限定で事実的なモノの世界に滲み出しつつあるコトなのである。つまり、問いかけの焦点は正確に言えば「事実性としてのコト」というよりも、むしろ「事実性としてのコトそのモノ」の次元に絞られたのである。さらに、私はこうした「事実性としてのコトそのモノ」の次元こそ、言語表現に限らず、われわれの生と死を含めた一切の事実的なアリスの足場であり、且つ当体でも有るという含みで捉えようとしている。言い替えればわれわれの生と死もまた「そのモノ」の次元に展開される何ゴトかであって、端的なコトの次元に尽きるものでは無いというわけである。<sup>5)</sup> もちろんこうした「そのモノ」の次元が例えばフッサールの記述したような関心 (Interesse) の一段階に即して成立する基体 (Substrat) や文法上の主語などにそのまま相当するものでないことは言うまでもない。<sup>6)</sup> さらには端的なコトとコト「そのモノ」を分ける「次元」という思想も、比喩的に活用されることの多い「Dimension」<sup>7)</sup> とかならずしも重なり合うわけではない。いずれにしろ「そのモノ」という「次元」そのものもまたここであらためて解明を必要とする考えであることは心得ておくことにしよう。

この一連の論究の始めに立てておいた自明性をめぐる問いとのつながりから言えば、差し当たっての主題はモノとコトの自明性を構成する四本柱の内、未だ検討し残された「証明抜きで,,,」という性格を「他者に纏わる否定性」<sup>8)</sup> と関連させて明らかにすれば足りる筈であった。ただ、これまでにたどってきた思考の経過と成果とを考慮するならば「他者に纏わる否定性」は、自明性現象のいわば表層に位置する、単なるトランスポートとしての伝達に関連した事象ではない。<sup>9)</sup> それがモノとコトの自明性を根底から構成する基本的な次元に棹さしている可能性はすでにダイクシスの論によって示され、さらにはモノとコトの明らめ合いと眩まし合いという仕組みの取り出しを通して、或る程度までは示されたと思われる。<sup>10)</sup> モノとコトの自明性を「証明抜きで,,,」という性格に絞って透視しようと試みる本稿の企ては、コレ、ソレ、アレ、ドレなどのいわゆるコソアド言葉に導かれて成立するモノコト論的な「そのモノ」性を解明して、モノとコトの自明性を「,,, そのモノ」という基本的な次元に潜む「開け」と「閉じ」の問題として、さらに詳しく、或る意味ではその裏側からも観察しようと企てることに他ならない。

自明性に関わる問いと応えの得られるべき舞台を調べようとした当初の段階では、「証明する」作業は広い意味において「他者を生み出す」作用に関連するものと理解された。しかもそれはインドヨーロッパ系の言語システムによって組み上げられた再帰的自明性の働く世界に固有の現象として取り上げられたのである。それはハイデッガーの表現にも見られるように隠れた自明性の次元から、眼前存在的に「措定されたもの」と「措定すること」の関わり合いへともたらすこと、或いはそのような措定的在り方へのもたらしをその一つの仕方として含むところの、より基本的な「ここへともたらすこと (Hervorbringen, 産出)」<sup>11)</sup> であって、まさしく「生み出す作用」に関連していたのである。すなわちまず以て自らと他者とを措定しつつ区別し、いったん措定的に立てられた他者の存在をあらためて否定する方法的な働きを通して、ことさら明確に自己を自立させる、或いは言うならば反措定する、という反照的な仕組みのもとに組み込まれた証明機能である。この連関に

において再帰的自明性と呼んだプロセスは、明確な産出的措定に先立ってあらかじめ他者を区別立てしているところの、暗黙の区別立て、言わば暗黙の措定の次元から出発点しながら、他者の揺れ動く暗黙の存在をふたたび暗黙の次元に押し戻してしまうのではなく、むしろますます措定的に眼の前に引き据え、こうして登場する他者をあらためて明確に否定し直す作業を介して、ことさらにハッキリとした自己措定へと踏み込んでゆくダイナミズムの総体だったのである。デカルトによって意識的に遂行された方法的懷疑も、そしてまた心身という二つの実体の回復のプロセスもこのような意味での自他の関わり方の痕跡を止めている。逆に言えば半ば措定的な自己確立へのひとつのプロセスとして果たされる他者存在の否定もデカルトを待つまでもなくすでに「方法的」なのである。他者の存在も、それが暗黙の内に物在性と了解されている以上、存在様相としては物体的実体の内に吸収されていて、それ以外の何か特別の領域を形作っているわけではないからである。要するに再帰的自明性の働く世界における、証明ないし証明抜きの問題はこのような形を取った自他のダイナミズムの現象に連動している。つまり再帰的自明性の下に立つ者の自立にとってまず必須の事柄は自己を確立するための否定的な契機としてあらかじめ他者を措定的に産出しつつあることである。そしてそのような産出とすることさらな否定を介してあらためて自己確立が達成されるプロセス（方法）の一性格として初めて「明確性（エヴィデンツ）」なるものも得られることになるのである。して見ればようやく手に入った自己存在の明確性がそうした存在を確立するために逆説的な形で一役を果たしている他者達への言わば当然の分け前として、その手元に送り返されているか（証明する）、或いは他者達にもその働きに見合った明確性の配分額を払い戻すことなく、明確に確立され終わった自己の手元にのみ、その成果が独り占めにされてしまっているか（証明抜き）の違いは、後々に生じる重大な係争問題で有り得るわけである。

或いは逆にこうした再帰的な脈絡において登場する「証明する,,,」という現象は、見出された「明確性」というコトを公共の場に押し広げてあらためて他者ともども担い直し、それなりに希釈するというよりは、むしろ、もっぱら自らの手元に純粹化された「明確性」の原子として囲い込み、処理可能で手渡しも出来るように確保されたところの、しかし、部分化され、或る意味では異常に孤立させられているとも言える、明確性「そのモノ」の次元の成立に基づく事象と受け取るべきもののようにも考えられる。いずれにせよ再帰的自明性のもとでは、証明ないし「証明抜き,,,」という現象は自己存在の措定的な確立の後までも単なる後始末以上の常に繰り返される本質的な未済の課題として引きずられてゆくのである。

このように再帰的自明性の下における証明ないし「証明抜き,,,」の問題は明確性ないし明確性「そのモノ」の成立事情から言っても、伝達ないしは配分の権利（或いは払い戻しの権利）というそれ独自の問題圏域をしたがえることが避け難い運びである。この意味では、例えばギリシャの数学においてのみ公理に基づく間接証明の作業が発展したという現象について、平等の自由人達によって構成される共同社会構造の在り方にその由来を求める見方が提案されているが、それも決して派生的でナイーヴな解釈のひとつとして退けることの出来ない本質的な洞察を含みとして成り立っていると言えるであろう。<sup>12)</sup>

しかし、証明という事象についての問いかけは、証明作業のもっぱらこのような「必須の後始末」性格を明らかにして十分な回答を得たとするわけにもいかない。証明作業には後にカントがその図式の論において要求したように、単に論理的で観念的なものに尽きず、それでいてやはり非感覚的でもあるところの真理把握という現象が、あたかも客観的な証示作業と一つになって顔を出しているからである。例えばいわゆる「非通約性の発見」という出来事を取り上げても<sup>13)</sup>証明の要請という現象は、明確でないし明確性「そのモノ」の共有や配分の権利主張に関わるだけでなく、直証的にでなく、むしろかえって、間接的に証明された事柄であって初めて真理であると言うように、そもそも真理概念そのもののヴァリエーションにも関わっていると見なければならないからである。

さて、以上のような哲学的文脈と違って、直接には「証明を要求する文化」を生み出さなかった、モノとコトの自明性の下では、証明ないし「証明抜きで,,,」という現象も、いくらか別様に捉えられなければならない。それもまた印欧語における場合と同様に「他者に纏わる否定性」という視点を通すこと抜きにして解釈出来ないことは否定できない。というのもこの場合、証明という事象は何よりもまず、モノに関わる事象だからである。モノ（者）に含まれた否定性に関わる事象だからである。しかし、モノとコトの自明性のダイナミズムには他者の半ば措定された存在を明確に否定し直してはじめて自己の存在の明確な確立に到るという反照的措定のpositivなプロセスは含まれていない。したがって自らの存在確立に至る反照的プロセス（方法）そのものの性格である明確でないし明確性「そのモノ」を陰の功労者たる他者達に後から配当金として割り戻してやらなければならないという「証明」債務などはそもそも始めから課されてすらいけないと言わなければならない。したがってまたモノとコトの自明性の下での「証明抜きで,,,」の性格も、「証明債務を支払わずに,,,」という意味のものでは有り得ない。証明債務は、もしあるとしても『手掛かり』にも述べたように「自己が自己「そのモノ」であるが故に、まさにその故に「他」でもある」<sup>14)</sup>というように、「そのモノ」を媒介とした自他の関わり方に呼応して生じて来る。言い替えれば自己に即して「他」が登場するのは措定作業の成果としてではなく、むしろ半ば措定された自他が解消されて、自己が自己「そのモノ」というむしろ非措定的な次元にいわば押し戻される限りでのことである。言い替えれば、この意味での「そのモノ」は明確に確保されたモノとして処理できる実体ではなく、むしろ処理の手の届かない「ソレ」の手許に委ねられた「モノ」なのである。

こうした定式は、ことあらためて他者を「産出」し、その上で他者を否定してはじめて自らが確立されるという印欧語的な方法的事情（Bewandnis）から遠く、さりとてまた、自と他の、言わばまったく無媒介の絶対矛盾的な同時成立を説く立場<sup>15)</sup>からも距離をおこうとしている。この定式を通して語られているのは、「他であるコト」という否定的要素（敢えて規定とは言まい）が自己「そのモノ」を満たしているコトを心得、したがってまたこのような自己「そのモノ」が、まさに他である自己「そのモノ」を受け止めつつある自己であると心得ているコト「そのモノ」であるという循環的事態である。このような形で敢えて言えば端的な自己に加えて、自己「そのモノ」という自体的な次元が自らの内に動揺を含みつつ、すなわち、他であるコトを含みつつ、登場するコトがすなわち「ココ

にワタシガ居る」というコト「そのモノ」の仕組みである。それは個別的でアトム的なモノとしての自らと他者が無媒介で直接的に結合したり分かり合ったりする仕組みではない。むしろそれは自らであるというコト「そのモノ」がそのまま他「そのモノ」の次元として言わば縦軸と横軸の双方において二重化されて現れているというコトに他ならない。この仕組みはまさに「そのモノ」を媒介としてこそ可能である。自己「そのモノ」に戻らぬままのワタシと君との間に成り立つ直接的で無媒介の関係ではない。このようないわば有媒介の関わりを「迷い」或いは「徹底しきっていない」<sup>16)</sup> として退けてしまうと、モノとコトの世界は手をすり抜けてゆく。モノとコトの自明性の組立は、したがってまたその一つの性格であるところの「証明」の組立も、「そのモノ」という或る意味では客体的な次元を抜きにしては不可能な「有媒介」の仕組みである。こうした段階における自と他の関わり方を自他というその「モノ」同士の「実在的」ないし「対象的」<sup>17)</sup> な関わりではなく、むしろ単に「自」と「他」という名辞化された規定性同士のコト的な意味上の関わりに過ぎないと考えて済ますわけにはいかない。モノとコトが基体 (Substrat) とその単なる規定 (Bestimmung) とにまったく重なるのであればそのような決め付けも有り得るであろう。しかし、そうした平行関係の成り立たないことはすでに『明るさとしての暗さ』において見たとおりである。<sup>18)</sup> コトは或る意味においては基体で有り得るし、また、モノも或る意味では単なる規定に過ぎないからである。

モノとコトの自明性に発して「証明」への要請が有り得るとすれば、それはモノゴト「そのモノ」の次元のこのような他性ないしは異化作用を介して成り立つ自他の関わりを映していない筈はない。半ば措定された存在者たる他者のもとに明確性の分け前を払い戻してやるという形而上学的な責務には到らないとしても、何かしら自体的で隠されたモノゴト「そのモノ」にまったく関わらず、一切が露わに登場するコトである限りでの端的なコトの次元に終始しては証明の要請の生まれる余地も有り得ない。逆に言えばモノとコトの世界に潜む「証明抜きで,,,」という自明性の次元も常にすでに何かしら自体的なモノゴト「そのモノ」を含んで構成される「有媒介」の「開け」の次元を沈殿させていて初めて可能であると考えられるのである。

そうすると、モノとコトの自明性の下で消長するモノゴト「そのモノ」同士の関わりの方、したがってまた「証明抜きで,,,」に関わる問いも、前稿において検討した「,,,ガ,, するコトそのモノ」のそれなりの明確性としての「明るさとしての暗さ」をひとつの「ワカリアイ」や「問いかけ合い」の現象と解釈して始めて何らかの意味ある応えを得ることの可能な事象であると言えることになる。

かくして、モノとコトの自明性を「証明」に関わる視点から検討すれば、探求は自ずと不動の事実性としてのモノゴト「そのモノ」の次元をまさぐり、したがってまた、この種の「明るさとしての暗さ」の核心に組み込まれている「もっとも根底的なモノ」<sup>19)</sup> としてのワタシ「そのモノ」という「共同」存在にもあらためて照明が当てられることになる。つまり、ワタシ「そのモノ」なるモノ (者) の生と死を含む一切のモノゴトのアリサマへと焦点が絞られることにならざるを得ないのである。この点を言えば印欧語の世界における「証明」作業ないし正当化の手続きを単なる表層的伝達の次元で受け取ってはならない

のと事情は変わらないと言うべきであろう。

前稿『明るさとしての暗さ』で扱ったような基本的な次元に関わる断定は十二分以上の吟味と確証とを経ておこなわれるべきであったろう。その要請を満たすためにこれまで公にした検討だけではいかにも先を急ぎ過ぎているようにも思えよう。しかし、私が「事実性としてのコトそのモノ」の核心に見て取ったと考えるモノとコトの仕組みは望んだとしても十分に突き固めた土台の上に細心緻密に組み上げられた頑丈なモデルの形をとって提供出来る性質のものでは有り得なかったであろう。仮にそのような望みがあったとしても「ワタシなるモノ」にはそれに応えるゆとりは与えられていない。ワタシに可能な働きはあたかも現場に駆けつける事件記者のようにコトの核心部に急いで、その仕組みの煌めく瞬間をレポートすることだけであったと言う他はない。しかし、ワタシは匆々に見て取ったところを「新鮮な記憶 (frische Erinnerung) の内で、」<sup>20)</sup> あらためてじっくりと味わいつつ組み立て直し、また可能であればいずれからか材料を調達して、その拠って立つべき土台を補強したいと考えている。自明性という現象を「証明」の視点を通して観察することも、この意味で事実性としてのモノゴト「そのモノ」という次元の核心に潜むモノとコトのダイナミズムを明らかにする仕事を補完する作業の一つに当るわけである。

さて、「証明」に関わる自明性現象の抱える仕組みが印欧語の下では決して単なる公共的世界における伝達と承認の次元に限られることなく、論理的で観念的にすぎないモノゴトをどのような仕方で敢えて真理として承認するかという問題についての暗黙の態度決定を含んでいるとすれば、それは言わば明確な主観的把握の外に立つ現象をどのような仕方でどの程度まで主観的な把握にかかわらしめるかという問題にもかかわる。逆に言えば主体に配された明確性 (Evidenz) によって支えられている筈の自己存在が或る意味では限られた自己を超えて絶対的で普遍的な性格を与えられるに至る可能性に関わるとも言えよう。そうすると「証明」に関わる自明性現象は根本的にはフッサールの見たように普遍的理性なるものに固有の自明性に関わってくると言えることになるだろう。<sup>21)</sup> 同じことを裏側から見れば普遍的理性には到らず、むしろ理性の否定的相関者である限りでの主観的ドクサの前提する自明性に関わることになる。つまり、形而上学の世界における自明性問題は証明という事象をひとつの展開軸として普遍と個別の間に拮がっているとさえ言えるわけである。

モノとコトの世界における自明性現象も、印欧語の世界におけるこのような意味連関にまったく呼応していないわけではない。モノとコトの自明性の世界といえども何かしら普遍的で理性的なコトどもにまったく近寄ろうとせず、終始一貫「論証」には背を向けて、主情的な個別性の段階に踏み止まっているわけではない。前述のようなモノゴト「そのモノ」という媒介者も、ワタシを含め、すべての個別的なモノゴト「そのモノ」に潜むそれなりの「普遍的自体性」に関わろうとしているのだからである。

モノとコトの世界も、結局、真理の問題を避けて通ることは出来ない。それも正当化の作業を自らの本質的な問題として受け取らざるを得ないばかりでなく、自体的で普遍的な真理という課題にも関わらないわけにはいかない。狭い意味での正当化ないしは間接証明の要請をギリシヤ文明に固有の問題であると考えた場合ですら、モノとコトの世界ではど

うしてそれが無用であるかと問いかけて、結局のところ、正当化「そのモノ」に関わってゆくという形で、この問題に関わらざるを得ない。或いはそれが無用だと言うことはどのような意味を持つかという形で真理「そのモノ」への問いを生じないわけにはいかない。そうした問題の解明を通して初めてモノとコトの関わり合いには明らめ合いと眩まし合いの仕組みが含まれているという洞察も、狭い意味での正当化ないしは証明作業を必要としない「真」の仕組みを見定めたものとして、あらためてその力量を検証されることになるのである。

かくしてモノとコトの世界の下では「証明」に関わる自明性現象がどのような姿を取っているか、という当初の問いに応えようとする、必然的に「他」の問題に逢着せざるを得ず、その結果としてモノゴト「そのモノ」という次元にも踏み込まざるを得ない。モノコト的な「証明する,,,」の在り方は、そうしたモノゴト「そのモノ」の次元の普遍的かつ個別的な媒介作業の証跡に他ならない。自他のモノコト的な関わり合いの仕方もそうした証跡のひとつとして現れているのである。

かくして、われわれの思考はモノゴト「そのモノ」といういわば自体的な次元の成立を核心として振幅の大きい多岐にわたった問題群を展開せざるを得ない。本稿はモノゴト「そのモノ」の成立に伴う普遍的理性や普遍的自体性の可能性の問題を当面の主題とするわけではないけれども、モノとコトの世界が、言わば一般的なモノゴト「そのモノ」を媒介項として成り立つ、それなりに一般的な一体性と、逆に個別的なモノゴト「そのモノ」たる「自」と「他」の、言わば部分的なモノ同士の関わり合いを介して成り立つ、逆説的な一体性の世界であることは、この機会にいささか調べておかなければならない。ともあれここでは以下のように問題を解きほぐしてゆこう。

- (一) モノコト的世界における証明は何を狙いとしているか。
- (二) コト文「そのモノ」とモノ文「そのモノ」について
- (三) モノ文の補強はどのような仕方でおこなわれるか。

結語

\* \* \* \*

- (一) モノコト的世界における証明は何を狙いとしているか。

モノとコトの世界における「証明」の有り様を示す二つの例を挙げておこう。

ひとつはいわゆる和算における「証明」である。吉田光由編する『塵劫記』は日常の算数に必要な計算の手続きを、塵劫ほど限らない年月が経っても変わらない不動の規則として、或る程度体系的に取りまとめたものである。<sup>22)</sup> つまり、狙いは単に相対的な堅固さを持つに過ぎない経験則の確立以上のものであったと言ってもよいであろう。しかし、それでいてそこで行われているのは論理的な意味での根拠付けではなく「かけてわれるさんの事」「蔵にたはらの入つもりの事」など、さまざまなタイプの計算において「,,, に,,,



を掛ければ,, と成る」「,, にて,,, を割れば,, と成る」などと具体的な数値解を伴う計算をして見せながら「右いつれも蔵により又八つみやうにもより又八俵の大小によりてちかい候へ共、大かたかくのことくと知へし」<sup>23)</sup> と実践のプロセスを帰納的に取りまとめて提示することに尽きている。そうした計算の手続きを正当化し、さらには得られた一般的帰結の正しさを論証しなければならないという責務はまったく受け取っていないのである。この態度は『塵劫記』のように「其綱領をしるして。聖門に入る。壺つのたよりとせん」<sup>24)</sup> としている入門書に限られたものではない。

建部賢弘の『綴術算経』は和算におけるほとんど唯一の方法論の書と評価されている作品であるが、ここでも証明や正当化の手続きに格別の注意の払われた形跡はない。例えば円周率を導出するために何種類かの計算を実行し、それぞれの数値解の列が4の乗数になっていることを観察し、それを提示してみせる（観察する）ことでこの数値列の極限值が4のn乗であることの「証明」はお仕舞いである。そこではいわゆる間接証明がおこなわれていないのはもちろんのこと、厳密な意味での直示も心掛けられてはいない。<sup>25)</sup> それは言わば「帰納的推論を伴う計算の実行過程」を証明の代わりとしている工学的な数学であって、現代おこなわれている「プログラミングの正当性の保持される様子を類似している」<sup>26)</sup>

もちろん、モノとコトの世界に住む吉田や建部が意識してギリシャ的な意味での間接証明やデカルト的な意味での直証性を避けたわけではない。ただそうした類の証明の仕方を知らなかったにすぎない。冷暖を自知する直証性とそうでない間接性の区別を知らなかったわけではもちろんない。それらが証明として用いられ、証明として埋め込まれるはずの仕組みそのモノを心得ていなかったのである。建部は『歴算全書』の翻訳者であり、オランダの天文学にも通じていたのであるから、間接証明を事とする西洋数学の一端にまったく無知だったわけではない。ただ当時の建部らの入手できた資料による限り、西洋数学は建部等がその方法的手続きまで含めて学び取ろうとするには初歩的に過ぎたのであった。<sup>27)</sup>

間接証明を遂行したり、経験的な意味での直示を果たしたり、或いはデカルト的な意味での直証性に訴えることなく、言わば生活しつつおこなわれる思索の実行過程を見せることを以てするタイプの思想は一人和算の世界に止まらない。モノとコトの世界に住み着く「証明」の有り様と無縁ではないもう一つの例を見よう。「哲学とは、この生きた生成の知をそのままに生き抜く働きにほかならない」<sup>28)</sup> 或いは「, , おのれは、このおのれの存在の根源的意味の企投を生き抜くより他にない。こうして、これらの様々の諸領域の営為の根本には、意味と無意味の根源的現象が、貫通しているのである。」<sup>29)</sup> これらの文章に繰り返し登場する「生き抜く」或いは「そのままに生き抜く」という主張は、普通に受け取ればもちろん観念的に獲得された知は実生活において自ら実証しなければならないということを意味し、哲学的思想としては自らの知の根拠付けを弁証法的に確かめつつ自己還帰的に生き抜くヘーゲルの立場や存在意味の実践的な了解そのものの次元へと自らを開こうとするハイデッガーの思想を包み込もうとしているものであって、そこに素朴な意味での経験的実証が提案されているわけではないし、とりわけ数学的な間接証明に関わる何ら

かの見解が意識的に含まれていることはなく、さりとて和算の場合におけるように知的根拠付けの問題全般に対する或る種のナイーブさが証し立てられているわけでもない。

しかし、巡りめぐった形でここに登場している、この「そのままに生き抜く」ということを根本的に規定している態度は言わばモノコト的に構想された間接証明の要請であると考えてみることは意味のないことではない。日常的常識の見解もヘーゲル哲学もハイデッガーの立場をもくぐり抜けて、その底に流れているのはモノコトの世界に立脚した証明(証示)の工夫であり得る。言い替えればここに現れているのもあたかも「帰納的推論を伴う計算の実行過程」としての「生き抜き」であり、それを以て最終的な意味了解とし、或いは究極の根拠付けのプロセスとするモノコト的な立場に他ならないように思えるのである。

「生き抜きの哲学」も「実行過程の掲額」<sup>30)</sup>も意識的無意識的の違いはあってもそれらがまさに「証明の」替わりを勤めているということを見無視してはならない。その意味で二つの立場が決して省略することが出来ない作業は、他に対し、或いは自分自身に対して何らかの形で「みずからの生涯を見せる」<sup>31)</sup>ことであり、「実行過程を並べて見せる」ことであることは認めておかなければならない。つまり「生き抜く」ということはすこし丁寧な言えば「立派に生き抜いて見せる」ことなのである。このように「,, , して見せる」という契機を含んで始めて「生き抜き」も証明に替わる実証としての「そのままに生き抜くこと」たり得るのである。真理の究極の根拠付けを最終的には「自らの生き抜いてきた生涯を見せる」という形で「自己還帰的生成の全体であり、生成してゆく自己還帰の全体である」<sup>32)</sup>ところのおのれを生成する正当化のプロセスとして鍛え上げてゆこうとするのが、モノとコトの世界に基本的な「問いと答えの仕方の体系」<sup>33)</sup>だと考量しうるからである。

もちろん、こうした「仮説」自身の「証明」も、そのような解釈が有り得ることをモノコト論的な意味での証示方法にしたがって示すことを以て満足する以外の方法を私が知っているわけではない。言い替えればこのような思想がモノコト的世界のうちにシックリとおさまり得ることを自らモノコト的証明の仕方にしたがって「提示」し、或いは「生き抜いて見せる」ことが出来ると、さし当りは言っておく他ない。

それにしても一体、どのような仕組みがあって演繹的な正当化の手続きが無視されてよいと心得られることになったか、さらにはどのような仕組みがあって演繹的根拠付けに代わる「帰納的に発見されたデータの提示」こそむしろかえって本来の正当化の手続きとして要求されることになったのだろうか。或いはさらに言えば、どのような仕組みのゆえに、デカルト的に先鋭化された直証性への指向や、経験科学的な意味での実証性に一線を画する態度が成り立って来たのだろうか。

時代と領域を異にして、しかも、或る意味では思考の次元をも異にしてなお呼応し合うこうしたタイプの「証明」の仕方を解釈するために、私の撰ぶ手掛かりは、まず、モノとコトの世界における発語の基本的な二つの形式なのである。現代語に限れば「 , , ガ , , , するコト (よ! ) 」のタイプと「 , , ハ , , , するモノ (だ) 」のタイプである。例えば「椋鳥ガさえずるコト (よ! ) 」と「椋鳥ハさえずるモノだ」の別である。こうした種別は古

典にまで遡り得るものであって、例えば「歎かせ奉るが心うきコト」<sup>34)</sup> に対しては「この門の前よりしも渡るモノか」<sup>35)</sup> などの例を挙げることが出来る。さらに学術的な文章ともなれば「,,, モノ」の類出するのは当然で「これを疑ふは、例の漢意になづめるモノなり」<sup>36)</sup> などが歴史的一回的な出来事を述べる「,, 星の事をさだせる事もなし」<sup>37)</sup> などに対応している。いずれにせよモノとコトの世界においても何らかの証明、或いは証明に類した作業が要請されうるとすれば、それは後者の「,,, するモノだ,,, モノなり」という形式の発語に向けられる場合に相違ない。なぜならこのタイプは前者のように歴史的情報や現場の状況を単に取り次いでいるのではなく、むしろ何ゴトかを判断して、その内容の真理性を積極的に主張することを意味しているからである。<sup>38)</sup> 何らかの証明の要請があるとすれば、それはこうした主張に対するひとつの反作用として、このタイプの主張自らの招く事態に属しているとも言えるであろう。カテゴリーインという告発作用がそれに対抗する防御措置に直面し、自らを一層強固に鎧おうとして、さまざまな権利根拠を並べ立てなければならなくなるのと同様である。その意味でこの種の発語は言うならば反応をあらかじめ予想している発語である。つまり、「,,, するモノだ」というタイプの発語を抱えているモノとコトの世界は当然のことながら発語に対する反作用とそれに備えての何らかの補強作業を心得た世界ではあるということである。

それでは「,,, するモノだ」というタイプの主張は一体どのような仕方で対抗してくる反作用をくぐり抜けるだけの「強さ」を身につけると考えられるだろうか。こうした問いに答えるために、この種の発語の持つ「弱さ」がどのような性質のものであるかをまず調べてみることにしよう。この種の発語に対する対応はその「弱み」を突くことになろうし、したがってまたその補強もまさにその弱点の補強を目指すに相違ないからである。

拙論『明るさとしての暗さ』は「,,, ガ,,, するコト」を不動の事実性の言語的定式としたが、<sup>39)</sup> この不動の定式における唯一の動性は、その「登場性格」にあると解釈しておいた。「登場」性格という表現はいささか奇異に響くであろうが、要するに「アラワレ来る」という局面に注目した限りでのモノゴトの性格を言おうとしている。したがってそれは問題を言わばテキストに内在する次元に限って「意味の生成」<sup>40)</sup> などを考えようという着眼からは遠く、むしろ現象学的な意味での前述語的現象 (Phänomen) の「自己能与 (Selbstgebung)」<sup>41)</sup> に呼応する事象であると言ってもよいであろう。ただ、登場性格の場合には後述するように言わば登場の逆の動きとしての「退場」性格をも含みとしているばかりでなく、通常の意味での流れる時間表象からも、論理的無時間性からも、さらには狭い意味での現象学的な時間構成作用からも距離をおこうとする「アラワレ来たり」である点に相違がある。「,, ガ,,, するコト (よ!)」という情報の取り次ぎは、モノゴトをこのような「アラワレ来たり」において、すなわち、その「登場性格」において述べているのである。

さて「,,, ガ,,, するコト」文の持つ登場性格は、実は「モノからモノへとアラワレルコト」と言い替えることが出来ると考えられる。例えば「椋鳥がさえずるコト (!)」という文においては「椋鳥 (というモノ)」が「さえずる椋鳥 (というモノ)」へとアラワレ来つつアル「コト」として述べられていると解するのである。このコトにおいて同じ

椋鳥というモノが背景に隠れたモノから前景に立って目立つモノへと位置を変えつつある。すなわちアラワレテ来る。「さえずるコト！」という発語によって、単なる椋鳥がさえずるコトの出来る椋鳥と化して、やがてはそれ自身の内部地平や外部地平をさらに豊かにする可能性を手に入れている。もちろん、この発語段階では、むしろただ背景から前景へと椋鳥の取る位置だけが変わりつつあると言った方がよい。したがってその意味では「椋鳥が静かだ（な）コト（!）」と言っても同じ「コト」なのである。要するにコトとはこの場合「さえずるコト！」や「静かだコト！」と言い立て、言い立てられて、不定で一般的な、背景に沈殿したモノとしての椋鳥から前景にアラワレ出る個別的で際立ったモノとしての椋鳥へと反転し、反転されつつアラワレ来る「動きそのモノ」なのである。

この意味においてコトとはすなわち「図であるモノ」と「地であるモノ」の間に成り立つ反転的な剥き出しの動きとして、アラワレつつアルコトであると言っても遠くはないであろう。もちろん心理テストのために用意された図と地の関係をそのまま、モノとコトの事例に当てはめることは危険であって、図と地の関係において偶々地の位置を占めていたからと言って、かならずしもモノコト論的な意味での背景であるわけではないし、逆に図たる資格が直ちにモノコト関係の上での前景であるわけでもない。あくまでも「反転」の動きにコトのアラワレの動きの重なる趣きが認められると言うにすぎない。ただ、このような留保条件を付けた上で、やはり、図と地の関わりはモノとコトの関わりを記述する上で示唆的で有り得るものである。

「,, , ガ」を伴って導入される椋鳥は始めの段階ではまだ「ガ」を伴うとも「ハ」をしたがえるとも決定されていない。いわば不定形における椋鳥である。その意味でそれは「地」としての椋鳥に当たる。「ガ」に出会い、そして「,, , するコト！」において締めくくられた椋鳥こそ「図」としての椋鳥に当たることになる。もっとも、ここで始めに導入される椋鳥という「モノ」は基体ないしは主語としての椋鳥ではない。或いはノエマとしての椋鳥でもない。敢えて言うならばむしろ逆に不定のノエシスとしての椋鳥だと言った方が近い。だからこそそれは「地」に相当するのである。その意味では逆に締めくくりを受け持つところの、一見作用的ノエシスに当たりそうな「,, , ガ,, , するコト」の働きこそ、登場するコトにもその実質性を欠くことが出来ないという意味では、むしろかえってノエマ的であり、つまり「図」的働きに相当するモノだとも言えるのである。と言うのも、数多くの孤立したモノが、まずそれぞれに登場して、やがて次の段階にいたって始めて相互の関係へと踏み込んでゆくという展開がここに想定されているわけではないからである。椋鳥というモノは、言うならば、その都度すでに関わりの内に踏み込んでいる。言い替えれば「テニヲハ」を通して示される関係の体系の内における、不定で一般的なモノ達なのである。そうであればこそ、前述のように＜鳥＞が飛ぶ、のではなく、＜鳥が飛ぶ＞という事実があるのだ、と言えるわけであるし、或いはまた「甲が乙に丙を与えるコト」において＜甲＞だけを主語として取り立てるべきものではないとも言われ得るのである。<sup>42)</sup> 西田幾多郎の「ノエシス的限定」<sup>43)</sup> なる考えも、作用的次元におけるコトとモノの超越論的対応性格を名付けている限り、こうしたモノコト論的仕組みを反映していると言えなくはないであろう。このようにコトとはつねにモノからモノへの関わりを含み、し

かも自らモノへと対応するところのコトたる性格を失うことなく、反転しつつ登場する動きに他ならないと考えられるのである。

まず「椋鳥,,,」と導入し、それを「,,, ガ,,, するコト (!)」と締めくくるコトは、それ自体としてはまだ単なる現場報告に過ぎなくて、椋鳥についての知的規定を詳細にするわけでないことは前述の通りである。それは椋鳥がより深く理解されようとして、その規定が詳細化されるプロセスに足を踏み入れようとしているわけではない。それはむしろ「椋鳥 (というモノ)」が「さえずる椋鳥 (というモノ)」へと反転を遂げようとしている出来ゴトにすぎないからである。それは丁度、ひとつのアスペクトの転換が、転換する以前にそうであったモノの見方の連続線上に新たな知識を付け加えることではなく、モノゴトの見方の全体的な場面転換で有り得るように、言わば新たな知の連鎖の出発点の形成に過ぎないとも考えることも出来よう。単なる現場報告とも解されている「,,, ガ,,, するコト (!)」という事態が、規定としての知識を増やすものでないとは、こうした意味で、言わば新しいモノへの反転を果たしつつある「コト」だからなのである。したがって、こうした出来ゴトにおいて大切なことは、アラワレタコトがどれだけ充分にアラワレ抜いているかという点に集約されることにもなって、反転の出来ゴトとしてのアラワレルコトがシッカリと果たされさえすれば、モノゴトの、知的規定ならざる了解も、それなりに深まる仕組みとして受け止められるということである。了解を充分に果たすためには当のモノゴト「そのモノ」に「成り切ってしまう」のでなければならないという類の言い方が、モノゴトの了解の極限的理想として掲げられる場合があるのも、このような仕組みを映し出していると言えるであろう。「成り切り」とはすなわち「完全な転換」に他ならないからである。このような転換の究極には、モノゴトを言わばその背後から洞察することになる「突破」の仕組みを想定することも出来るがそれについてはまた別稿で主題としよう。

さて、以上のようなコト文に対して「,,, ハ,,, するモノ」文はモノゴトをその「退場性格」において述べていると言うことの出来るものである。しかし、コト文がアラワレ来る新情報の瞬間的転換の鮮やかさを以て、或いはそのタウマゼイン性格<sup>44)</sup>のゆえに、「登場的」と形容されることは納得できたとしても、モノ文に「退場」性格をあてがうとなるとにわかに賛同は得られないかも知れない。時の流れに沿った生成には同じく時の流れにしたがった消滅が伴っている。私がモノ文に読み取る「退場」性格が、そうした生成概念の相関者である限りでの消滅性でないことは言うまでもない。

コト文の場合と同様の言い換えをおこなうならば「,,, ハ,,, するモノ」文は「コトからコトへと隠れるモノ」と言い表すことが出来る。その「退場」性格なるものもこうした動きを名付けたものである。「椋鳥はさえずるモノ (だ)」という文における「椋鳥」は、さし当たりまず不定の、その限りでの「閉じたモノ」である。その意味ではまだ背景に沈殿した、言うならば「一般的な個別者」たるモノに過ぎない。こうした「椋鳥 (というモノ)」が「,,, ガ」ならぬ「,,, ハ」をしたがえて「椋鳥ハ」という形を得て「主題化」<sup>45)</sup>されたとき、それは実は「椋鳥ハ？」と問いかけられているのであり、椋鳥というひとつの一般的な形を取り、不定形の内に「閉じたモノ」が「椋鳥というコト」へと揺らぎ、開かれつつあるのである。「椋鳥ハ,,,」は、それについて何らかのコトを言い立て

て、背景から前景へと登場させる働きの内で、ただ位置関係だけが背景から前景へとを変わりつつあるところの「閉じた」モノとしてあるわけではない。不定形におけるモノを超えて、定まったモノとしてあらためてシッカリと「閉じられる」コトは「,,, するモノだ」という形に納められて始めて実現する。その意味で「,,, モノだ」は言わばアスペクトの反転を封じ止め直しているのである。

「椋鳥ハ,,,」が「,,, ハ」を伴うことによって動揺し始めているとすれば、「,,, ガ」を伴った場合は、逆にむしろ安定を獲得しているとすら言える。安定といってもなだらかで持続的な安定ではない。反転する新たな登場の動きの踏切台ないし転換軸としての堅固性であり、跳躍への用意を武者震いの内に秘めた静止性である。「,,, ハ」はそうした緊張を与えない。この意味で「椋鳥ハ？」はまだ定まった形で「閉じたモノ」によって締めくくられる段階には到らずして、むしろ「椋鳥という開けた動揺しつつあるコト」へと一步を踏み込みつつあるにすぎない。言い替えれば「すでにそこにいる閉じられ完結したモノとしての椋鳥」に問いかけのメスが入り、動揺しつつ有るコトとしての椋鳥の次元が展開されようとしているのである。もちろんこれは「椋鳥という基体（モノ）」について「椋鳥であるという規定（コト）」が述語されようとしていると言える事態ではない。敢えて「規定作用」に結ばれてゆく関心（Interesse）<sup>46)</sup>の動きに関連付けて言えば、それまでは言わば沈殿した不定性の内に閉じられ、その意味では安定していたモノが自らを「開き」、やがては様々のコト的規定の内に自らを解消し尽くす可能性をも含めて、不定のモノとしての自らを言わば壊しつつある段階なのである。こうした展開は孤立した基体的事物があらためて他の事物との関係を形成してゆくという意味での「開き」ではない。ここで見て取られているのは実在的关系の上でも、認識的関心の展開の上でも、そのような「開き」ではない。椋鳥が、そのような関係の仕方をも含めて、いずれにせよ何らかの仕方で、もともとすでに「テニヲハ」を通して示されるような関わりの内に有ることはすでに述べたとおりである。

つまり「椋鳥ハ？」はすでに有る「テニヲハ」的関わりの内に、その限りで閉じこめられたモノとしての椋鳥をそのままに放置しておくコトではない。さりとてまたそのような椋鳥を登場のための踏切台として活用しようとするわけでもない。そうではなくて、モノであった椋鳥をコトとしての椋鳥と化しつつあるコトなのである。ひとたびこのような動揺の道に迷い込んだ椋鳥が、ふたたびモノとしての「閉じ」を手に入れるには、「うるさいモノ」という応えを与えられ、そのような形を取って、新たな「モノ」の内に閉じこめられ、そしてふたたび祭り上げられ、忘れ去られ、不定のモノという形で沈殿し直すコトを待たなければならない。すなわちコトの「棚上げ」機能<sup>47)</sup>の働くのを待たなければならない。先に述べた「コトからコトへと隠れる動き」とはまさにこうした動きを指したのである。

もっとも、「うるさいモノ」はモノであってコトではない。モノ文の動きとは、もし有るとしても、「コトからモノへの動き」と言うべきではあるまいか。「コトからコトへと隠れる動き」という定式化には無理があるのではないだろうか。もちろんそう言いたければそのように表現しても良いのである。実際、この動きは「椋鳥ハ,,,」と開くコトから

「,, , うるさいモノ」と閉じるコトへの動きである。その意味ではコトからコトへの動きには相違ない。しかし、ここに働く「閉じるコト」は、まさに「モノ」のモノ的な働き以外の何モノでもないのである。この仕組みは「犬ハ？」と問うて「動物である」と応えてみるともっとハッキリする。それは「犬ハ？」と「開いて」「動物であるというコト」においてふたたび自らを「閉じる」からこそ全体としてまさに動くコトで有り得るのである。同様にして「棕鳥ハ？」と問う「コト」から「うるさいコト (!)」への動きの内にこそ、棕鳥という「モノ」はアルのである。前述のように「棕鳥がうるさいコト (!)」は全体としてひとつの「コト」であった。「<鳥>が飛ぶのではない。<鳥が飛ぶ>という事実があるのだ」と言った西田幾多郎の言葉を思い出してみよう。これになぞらえて言えば「棕鳥ハうるさいモノ」も全体としてひとつの「モノ」なのである。すなわちひとつの「動きとしての閉じ」なのである。西田幾多郎にならって言えば「鳥ハ飛ぶモノ」とは「<鳥ハ飛ぶ><モノである>」と言っているのである。<鳥は飛ぶ>に重ねてそれが<モノである>コトを言っているのである。それは「鳥は飛ぶモノという事実がアル」と言うのとは大いに異なっている。「鳥」が「飛ぶコト」の内に自らを閉じているコト、それが鳥というモノの全体として、すなわち「テニヲハ」を通して関係項のすべてが関わり合ったモノとして、アル形だと言っているのだからである。こうしたモノを、すなわち「動きとしての閉じ」を、カクレと呼ぶならば、或るコトから或るコトへのカクレ（閉じる動き）の内にこそ、モノとしての棕鳥は位置付けられることになると言ってよいわけであろう。鳥が個別的で部分的な意味でも「モノ」であることを否定する必要はない。それはまたしかし、このように全体的な退場の動きとしての「モノ」の内でこそまさに「モノ」としてアルのだということである。

さて、「,, , ハ,, , するモノ」文に「退場性格」を帰しておいたのは、以上のような意味での「閉じつつ隠れるモノとしての動き」を言い表すためであった。「退場性」は非登場性や静止性からさらに一步を踏み込んで登場性と逆方向の積極的な動きをあらわしている。私がモノ文に固有の「弱さ」を、したがってまたモノ文に固有の補強の必要を語ろうというのも、実はモノ文のこのような「退場性格」に即してのことである。

そしてまたモノ文の弱さがその「退場性格」にあるとすれば、その補強作業は「退場を引き止めること」或いはさらに進んで「退場を登場へと転換させること」によって果たされることになっているはずであろうと推測されることにもなるわけである。

しかし、それにしてもモノ文はその退場性格のゆえに自らを補強しなければならない、とは如何にも奇妙な言い草ではある。こうした表現が一体何ごとを意味し得るのか、もうすこし説明を試みなければなるまい。

「棕鳥がさえずるコト (!)」というコト文に対して「どうして？」と問い立てるのはすこし奇妙である。新情報をただ文の場に取り次いでいるとも解されているこの種の文<sup>49)</sup>に格別の「弱み」は無い。アラワレ来るコトの全体を丸ごとそのまま取り次いでいるだけだからである。しかし、モノ文になると違う。必ずしも主観的な判断作用が加わるという理由からではない。モノ文そのものは与えられた情報を独自の視点から配列仕直して結合したり、或いはそれを処理可能なように確保するという意味での能動的な判断性格を始め

から持っているわけではない。それでもモノ文がモノ文である限りにおいて、すでに抱え込んでいる「弱み」はある。実存カテゴリー的な表現を借りるならば、モノ文としてのモノ文は不断に自分自身から逃走しつつある自己崩壊的な性格を有しているということである。奇を衒ってことさらに奇妙な言い草の筈を編んでいるわけではない。例えば「成人は結婚生活を営むモノ」という類の半ば命法を含んだ風俗を記述するモノ文ならば「自己崩壊的」などと形容してもそれほど奇怪には響かないであろう。風俗習慣が堅固のようできてまことに脆い基盤の上に自らを維持していることはむしろ常識に過ぎない。風俗習慣とはよく「見せつけ」シッカリ「見習う」ことを当てにして辛うじて保たれている「モノ」である。ここでは習俗的な命法を「…するモノだ」としてあらわすこうした「モノ」と「椋鳥ハさえずるモノ」のように、純粹に自然法則的現象をあらわしているように見える「モノ」に共通する、言わば意味素の如き部分を考えようとしているのである。モノという語の「未分化性」を退けようとして、その多様な意味を区別しようとするよりも、むしろその「統一的な意味」を求めてゆくときに「自己崩壊的」などの表現が「本来の」適用領域を越えてクローズアップされることにもなるのである。

いずれにせよモノ文は前述のような意味でのコト的な反転をあらわさない。反転作用の上では、すなわち新たな転換をアラワに果たして見せる作業の上では、むしろ逆に「閉じ隠す」というネガティブな価値しか持たない。モノ文は単に確保され処理できるようになった同じ内容のコト文ではないのである。もちろん、そのような解釈をまったく受け付けないわけではない。「椋鳥ガさえずるコト」という言わば一回的な出来ゴトは「椋鳥ハさえずるモノ」という「知識」となって確保され手渡されるように変様される。その意味ではモノ文が「悟性対象」<sup>50)</sup> を表現する文型式として立派に活用できることを否定する必要はない。しかし、風俗習慣をあらわす場合に限らない。モノ文は知的内容の点でコト文より豊富で有り得るけれども、言うならば「認識の様式」の点で、まさに自己崩壊的なのである。モノ文の動きはアラワレルコトのコト的な（すなわち自らをアラしめる）動きに逆行するカクレルモノのモノ的な（すなわち自らを無化する）動きと言わなければならないものだからである。

もっとも、このように「認識の様式」なる表現を用いても、それは比較によって事柄を明らかにすることを助けるという便宜上の処置を超えて、モノとコトをもっぱら「認識の様式に関係した範疇」<sup>51)</sup> として取り扱おうとするものでないことはあらためて注意を要する。モノとコトの世界においては、実在とそれを受け止める認識、場合によってはそれを構成する認識という組み合わせの片側に、モノとコトという様相が区別されているわけではない。むしろ、実在と認識という言葉は形而上学的な区別そのモノがモノとコトの区別にしたがって現れるのである。言い替えればそのような区別がまさに「モノに成っている」場合と単にコトに止まっている場合が区別されるのである。それは実在と認識という区別そのモノをどのように認識するかという認識の様式の違いではなく、その区別が実質的な「モノと成って」働くか、或いは仮象のコト<sup>52)</sup>に止まるかという、まさにモノコト的な区別なのである。いずれにせよモノとコトという「カテゴリー」が実在と認識の組み合わせとはまた違った仕方の区別にもとづいているという事態の記述こそまさにわれわれの



思考の課題に他ならないということをこの際あらためて確認しておこう。

ともあれ、モノ文が自らを隠す働きをしていてその点で自壊的であるとも言えるのは「認識の様式」の上でのことであるとさし当たりは取りまとめておくことにしよう。要するに風俗習慣をあらわす場合に限らず、モノ文は、モノ文としてある限り、自己顕示的なアラワレとしてのコトの動きを直ちにに取り戻し始めて、自己隠蔽的でしかも自己崩壊的なモノとしての動きを抑えようとするのでなければならない。モノ文に向けられる「証明せよ」という要請も、モノ文の持つこうした隠蔽的な性格に狙いを付けてのことである。

以上のように考える時、モノ文に向けられる「どうして？」という問いかけは、実は何よりもまずモノ文の隠蔽性と自己崩壊性を喰い止めて、自らをシッカリと保全し直せという要請に当たっていると解することが出来るであろう。証明の要請はしたがって、或る意味ではモノ文をコト文に引き戻そうとする要請でもある。コト文の立場からする、モノ文への働きかけであると言ってもよい。何ゴトかを登場の相においてアラワスという働きから身を引いて、言い替えれば主観的な受け止めに左右されかねない、その場限りの「告げ知らせ」の相から身を引いて、或る意味では客観的で自体的な次元に身を置くべく、退場しつつ、隠蔽しつつ、しかも、それでいてやはり「告げ知らせよう」と敢えて自己矛盾的な意味生成の企てを抱えこんでいるのがモノ文だとも言えるからである。証明の要請はその意味では事柄をもっと単純明快にしてくれと要求しているのだと言ってもみることも出来るようか。

コト文に引き戻そうとすると言っても、この時、モノ文に求められているのは、単純に何ゴトかを「明らかにするコト」に変わってしまうことではない。モノゴトを明らかにするコトそのモノは本来のコト文に与えられた使命だからである。そうかと言って明かなコトをモノの働きによって「支える」<sup>53)</sup> ことが求められているのでもない。「支え」としてのモノの働きは、モノ文において果たされるわけではなくて、コト文自体に組み込まれたモノの働きによって果たされる筈だからである。「明らかにするコト」とその「支え」としての「モノ」の関係は伝えられた現場情報の直接的証示に関わるとは言えても、モノ文に委ねられた、言わば「帰納的計算の実行過程の提示」に当たる部分に、関わるものではない。言い替えれば「間接証明」に呼応する証明の仕方に関わるものではない。コト文におけるこのようなモノの働きに対しても「証明」という表現が有り得るとしても、それはモノ文の埒外に属する直接的証示に過ぎない。ここでモノ文に求められているのはそれと違って、モノ文自身におけるモノの証明的働きなのである。したがってもしモノ文が自分自身を証明しなければならないモノと自ら心得ているとすれば、それは自己矛盾的な崩壊傾向に自ら抵抗することを責務として受け取るモノ（者）の（,,, するモノと心得る）という行為的了解の筈であろう。モノとコトの世界においては単に目的設定的企ての段階に片寄ることなく、生まれた結果に対して責任を取る場面まで含めて、初めてひとつの現実的行為の概念も成り立ち得る仕組みが貫徹されている事は別稿に論じた。つまり、モノ文における「,,, するモノ」という心得は言わばモノ（者）自身による「モノ」の心得であって、それは結果に対して「,,, するモノ」という形で責任を引き受けるコトまで含んで初めてひとつの行為であり、ひとつの「文」ですら有り得るモノ（者）の心得なの

である。

## (二) コト文「そのモノ」とモノ文「そのモノ」について

モノ文における自己崩壊性とそれへの抵抗という現象をモノ文の意味（ワカリ）の成立という観点から観察してみよう。前章に見たように、モノコト的世界における「証明」の在り方からして、焦点は自ずとこの点に絞られることになるからである。モノ文に向けられる証明の要請とモノ文の立場から果たされる証明の実行が協力してモノ文のモノ文である限りでの「意味」の形成に寄与すると考えられるからと言ってもよい。弱みを持ち、弱みに対処することで成り立っているのがモノ文の意味であり、モノ文という意味であると考え、コトからコトへとカクレルモノという自己崩壊とそれへの抵抗の仕組みにおいて、或いは「,, , ハ? ,,, , であるモノ」という「問いと答えの仕組み」において、モノ文としてのモノ文が、すなわちモノ文的な「意味」の成立が、どのようにおこなわれるかを調べてみようというわけである。それが、いずれにしろ自らを補強しなければならないモノ文の自己補強の仕方を調べることに相当しよう。

「意味（ワカリ）」なるものの成立の仕方を調べてと言っても、ここで言語的意味の、歴史を遡った発生論を展開しようというわけではないし、また幼児の言語習得の始まりに焦点を合わせた心理学的発達論の後を追おうとするものでもない。もっとも、そうは言っても経験的に取り扱われる意味の発生論に一切無関心であるべきことを主張しようというわけではない。実は「意味の喪失」に関わる議論ならば、経験主義的な発生論といえども大いに関心を惹きつける材料を提供できるのである。普通、経験的に意味の喪失が問題となるのは、老耄と狂気が主たる場面である。しかし、老耄は意味の喪失に関わりはしても、経験的な取り扱いの上で、意味の新たな獲得に関わる現象ではない。それは経験主義的に取り扱われた限りでの意味への関わり方において、幼児や未開人のいわば対極にあって、幼児の言語獲得現象や意味の歴史的発生現象の、言わば方向を逆にしたプロセスに過ぎない。これと違ってわれわれの「経験的」関心の対象となり得るのは、意味の喪失と意味の獲得とが言わば論理的な同時性において自らの問題となってしまう「狂気」現象である。言い替えればさまざまな仕方でまさに喪失しつつある意味が、獲得されつつある意味に並んで、或いはそれ以上に重い役割を演じている場合である。自明性の喪失経験を訴える患者の証言を手掛かりに、モノとコトの世界における行為の在り方を論じた旧稿も、こうした趣旨で狂気における意味の喪失と獲得現象に含まれる示唆を生かそうとしてのことであった。<sup>54)</sup>

意味の、経験主義的に解された獲得と喪失という現象も、コト文とモノ文の在り方に即して表現し直せば、登場と退場という現象としてあらわれる。とりわけモノ文に即した「意味（ワカリ）」なるものは、前章に述べた見方にしたがえば「コトからコトへと退場するモノ」を引き留めつつ果たされる登場現象であると言えることになろう。こうした意味現象はこれまでも取ってきた表現の仕方を踏襲すれば、モノ文の備えた「明るさ」と言ってよいモノである。

こうした「明るさ」の内では、モノ文「そのモノ」がいわば客観的に備えているところ

の意味現象と、そのような意味現象を理解する「ワタシ」に定位することの可能な、広い意味での認識的な働きとがひとつに重なっている。重なり合った二つの一方だけに焦点を当てれば、或る何らかのモノ文の意味は「,,, とアラワレテアルコトとしてワカリツツアルコト」とも言えて、その限りでは「,,, ガ,,, する（とワカル）コト」としてのコト文と異なりはしない。しかし、重なり合ったワカリの一方はワタシに定位し得る認識了解的なワカリ（判り）であるとしても、ワカリのもう一方はモノ文「そのモノ」の在り方としてのワカリ（分かり）なのである。「,,, とワカル」という表現形式が、「山本ト申します」など、名乗りの出所を示す「と」の働きのハッキリと見える例からもわかるように、モノ文の意味「そのモノ」を、単に認識する者の側からの一方向的な「判り」においてではなく、言わば認識されるモノ文の意味「そのモノ」の側から提供される、名乗りの「分かり」との二重性において示し得る可能性については別稿に紹介した通りである。<sup>55)</sup> こうした二重性を含みとして、つまり「そのモノ」の側の重みを考慮に入れた上でなら、「,,, ハ,,, するモノ」というモノ文の「明るさ」は「,,, ハ,,, するモノとワカル（モノと知れる）コト」であると言っても差し支えないであろう。すなわち、名乗りのワカリとの二重性という言わば形式的な特質に着目する限り、コト文と変わるところはないものの、「そのモノ」の側の提供してくる内容とその仕方には差異があるのである。そこで、コト文とモノ文をあらためて見くらべてみる。「椋鳥ガさえずるコト（!）」これはまさに「,,, とアラワレツツアルコトがワカルコト」に他ならない。他方「椋鳥ハさえずるモノだ」は、いわば客観的な文であって、「椋鳥のさえずるコト」が「アラワレヨウがアラワレマイが」、そのコトが「ワカロウがワカルマイが」とにかくく、, さえずるモノだ>」と強要するところに「意味の有る」文である。敢えて言えば、この種のモノ文の意味は、コト文の場合と異なって、むしろアラワレナイ、ワカラナイコトを「強要」しようとするところにこそ、その特質が有ると言えるわけである。極端に言えば「ワカッテもらう」ことなど始めから拒絶して、あろうことなら無理矢理にでも押し通してしまおうとしているのである。この時、モノ文が当てにしている類のワカリがもしあるとすれば、それは、モノ文の言おうとしているコトがらを、直ぐさま直接にワカルコトではなくして、言わば間接的にワカルコト、言い替えればワタシミングにおいて、初めは単に「強制されたモノ」としか受け取られなかったコトが、やがて「そのコトに思い当たる」という仕方で受け止め直されるコト、それまでの間は、言わばブラックボックスの内部の目暗歩きを余儀なくされるコト、そのような形を取ったワカルコトである。要するに強要性に対応するワカリは「思い当たるコト」としてのワカリ、或いは「思い知らされるコト」としてのワカリであると言えるであろう。したがってワカリをこのような形でしか当てに出来ないモノ文の立場としては、自らの発語を端的に「言う」のではなく、むしろ「言うておく」という放任の次元に位置付けることにもなるわけである。このような言いまわしは馴染みの深い平俗な処世訓などに気脈を通じるものではあるが、そうした処世訓的な判断の内にも、日常卑近な次元を超えて極めて基本的な「実存カテゴリー（「モノコトカテゴリー」などと言っても、それには学術上の市民権が未だ与えられていないので、仮にこう表現しておく）」として重要な意味機能が語り出ている、しかもそれが広い意味での知的な判断

の、言わば存在論的性格に相当する部分までも規定していると考えられるのである。つまり、後述するようにモノ文「そのモノ」がコト文に還帰してゆくという円環構造を可能にするワカリの在り方が、ここに言う「思い当たるコト」なのである。

「思い当たり」とはこの場合、「あの毒はAが入れたモノと知れた」或いは「そういう時はこうする（なる）モノ」など、原因、法則、場合によっては動かし難い運命など、否応なしに承認せざるを得ないモノとしてのワカりを「或る何らかの距離を介して、再帰的に」ワカルコトである。こうした「思い当たり」という形のワカリ、或いは「思い当たるコト」に不可欠の特質は、それがまさに実質的なモノに支えられた再帰的なモノだということである。モノに支えられていると言うよりはむしろモノに纏わりつかれていると言った方が適切かも知れない。本来距離が有る筈と、振り払っても振り払っても、どうしても纏わり付いて止まないモノをワカラされてしまうコトだということである。思い当たられるワカリは原因や法則や運命など、さまざまな動かし難い条件によって圍繞されそして縛られているという世間的な（世界的な）ワカリである。モノ文の意味が実質的なモノに支えられているとは、それがこのように、法則、原理、理由、その他諸々の「., する（なる）モノ」に纏わり付かれ、縛り付けられているというモノワカリだということに他ならない。こうしたタイプのワカリは一方向的に能動的なワカリではない。そのような側面の有ることはもちろん否定できないとしても、まさにそのようなワカリ「そのモノ」の実質として、何やらワカリを超えた、その意味でワカラナイ「モノ」が自らを押し出してくるような、そんな受動的なワカルコトなのである。だからこそそれは「再帰的」と言えるのである。ワカリが判りと分かりの二重性であるとすれば、それはモノ文のこうした我が身に立ち返ってくるような形の受動的な仕組みにおいてもハッキリと浮かび上がっている。

モノ文のワカリにもまた「そのモノ」という表現が有り得るとすれば、それはまさにこのようにして、モノ文の意味（ワカリ）を実質的に支え、取り巻き、そして縛り付けているところの、この再帰的な二重のモノ「そのモノ」を指している。

フッサールは多くの像を経巡りながら、狙いはあくまでも当のモノ「そのモノ」に止まり続けている持続的な意識の在り方を関心 (Interesse) と呼び、そこに「基体 (Substrat)」概念の成立する端緒を見て取った<sup>56)</sup> が、モノとコトの世界におけるモノ的な「ワカリ (判り)」という、広い意味での認識的な働きにおいても、個別的で部分的なさまざまなモノゴトの認識を経巡りつつ、実は認識自身がそうした認識の連なりを、認識自らの被圍繞性であり、束縛性であり、因縁性であると再帰的に受け取っていて、そこにはフッサールが見たのと同様に、或る意味では唯一つの持続的な中心点ともなるべきモノの了解が潜んでいる。それが他でもない、ここに言うモノゴト「そのモノ」という表現によって狙われているところのモノである。そしてこのような「そのモノ」に、モノとコトの世界における「自体性」概念の成立するもとを見ることが出来るばかりでなく、同時にこの世界における「一般性 (普遍性)」概念の原型を暗示するモノも、ここに潜んでいるように思われるのである。

モノとコトの世界の意味連関の中で、実践を離れ、多少とも観想的な仕方で「そのモノ」

に出会うためには、必ずしもさまざまな度合いにおける抽象化作業を経ることではなく、そもそもそうした抽象化作業が可能になるための基本的な身構えとして、さまざまなモノゴトの連鎖に囲繞されてもはや身動きならないという、むしろひとつの「諦念」の成り立っていることこそ必要であると考えられる。そしてまたこの囲繞性には多くの個別的で部分的なモノ共を経巡り、そのようなモノゴトに纏わり付かれるという性格ばかりでなく、まさに或る距離を取った開けの下で、それなりに「遠望しつつ、見渡している」という仕方でも「そのモノ」に出会っているという事態も同時に含まれていて、そこにモノとコトの世界における「一般性」概念の成立のもとを探り当てることも出来るのである。

ワカリ「そのモノ」という、こうした表現はワカ리를対象として措定し、意味の上で無色透明の、自体的ないし一般的な「そのモノ」の次元を開いているというわけではない。もちろん、この表現をそのような含みで用いることが可能であることは言うまでもない。近代の日本語が哲学や科学の言辞を移植しようと企てて以来、この可能性はすでに単なる可能性の段階ではない。ただ、ここに取り扱っているモノ文のいわば当体としてのワカリ「そのモノ」は無色透明ではない。そのもっとも根本的な次元において、もともとすでに「思い当たり」というモノ的認識に呼応する実質的なモノワカ리의色に染め上げられている。或る種の色を以て染め上げているばかりではなく、そのような性格こそがモノ文とコト文という形を取らせてもいるのである。要するにモノ「そのモノ」とはまったくニュートラルに無色透明のモノ一般を言っているわけではない。モノ「そのモノ」とは、法則的、原理的、運命的など、何らかのモノ的なワカリ（分かり）「そのモノ」なのである。それも法則的なワカリ「そのモノ」の他に、それを支える何やら格別の実体的なモノが立てられているわけではなく、当の分かりを組み立てているモノの実質性「そのモノ」が言及されているにすぎないのである。

さて、こうした「思い当たりそのモノ」がモノ文のいわば実質であって、それがモノ文のモノ文としてのワカリ「そのモノ」をなしているとすれば、モノ文は言わば自らの腹中にむしろワカラナイモノを抱えていると言わなければならないことになるであろう。「ワカラナイモノが自らを押し出してくるような受動的なワカリ」と前に述べておいた事態である。

モノ文としてのモノ文のワカリ「そのモノ」がむしろワカラナイモノを含むなどと言っても、これはそれほど奇矯には響かない筈であろう。文が文ならざるモノと関わりながら用いられるということは、文として当たり前のことに過ぎないからである。普通、語が指示するのは語ではないところのモノゴトであるし、文が述べるところも文ならざるモノゴトその「モノ」である。言い替えれば語にも文にも言わば限界があって、その限界をまたぐ仕組みが指示作業であり、意味する作業である。或るモノゴトがワカル、とはこの意味で「限界をまたぐ」指示なり、意味作用なりが十分に機能するということに他ならない。もちろん、指示や意味作用が十分に機能するとは、単に語とモノゴトとの間を、或いは文とその述べる事態との間を、等号で結ぶことに尽きるわけではない。或るモノゴトがワカルとは多くの場合、むしろ、当のモノゴトがデキルことを含意している。碁がワカルとは碁を打つことがデキルことであり、ドイツ語がワカルとはドイツ語で読み書きがデキルこ

とである。つまり、語や文について語られ得るワカリとしての指示作用や意味作用の働きは、それぞれの仕方で限界を越えてデキル（出来る）ことであると取りまとめることが可能であろう。このような類の可能性概念を単なる「出て来るコト」と区別して「何人かという場」のもとに「出てくるコト」として説明しようとした和辻哲郎の試みは別稿に取り上げておいた。<sup>57)</sup> その解釈のヴォルトシュピール的な見かけにも関わらず、そこで受け止められている事態そのモノは注目を払うに値するものである。そこではまさに「出て来るコト」という表現を通して、語や文が語や文というモノとして言わば必然的に「限界を越えて到来する」という「ワカラナイモノが自らを押し出して来る」ような性格を持たざるを得ないことが見て取られているからである。

語や文は語や文「そのモノ」としてある限り、すべて自らの限界に立っている。いわゆる限界状況を表す特定の語ないし文だけがそうだとするわけではない。世界の限界を表示する言葉だけが限界に臨む言葉ではない。語や文は語や文「そのモノ」として常に自らの限界に関わらざるを得ない。それも「限界を踏み越える」という仕方でそれに関わっていると考えられるのである。語や文の意味が理解されるためには、それぞれ「モノ」として、その限界が含まれていなければならない、しかもそれらは踏み越えられるという仕方で含まれているのでなければならない。これはおよそ意味を持つ（すなわち、ワカルコトの出来る）すべての語や文に共通の仕組みであると考えられる。

例えば「言詮を絶した」深刻な場面などではなく、ごく普通の意味で語や文がその限界に直面させられる場合を考えてみよう。共通の普遍者によってあらかじめ媒介されていることのわかっていない言葉を使用しながら意志の疎通を図ろうとするなどの場合である。この時、われわれは語や文だけに頼って語や文の持つワカリを実現することは出来ない。指先その他の身体的動作をそのために援用しなければならない。直接に言語使用者の身体を用いなくともよいが、いずれにせよワカリアイが「出来た」という経験を得るためには語や文でないモノゴトを語や文に添えて使わざるを得ない。コレ、ソレ、アレ、ドレ、など、語の用いられる場（舞台）に応じて指示されるモノゴトが相対的に決まってゆく類の語の場合である。インドヨーロッパ語の文法カテゴリーとしてはダイクシス（指標詞）と呼ばれ、わが国の呼称としては「コソアド言葉」などとして取りまとめられている語群がこれに当たる。ワタシ、キミ、カレ、などのいわゆる人称代名詞もその時々に応じて指示される人の実体が異なるという意味ではダイクシス（指標詞）に準ずる。このような語群とは対蹠的なのが通常の名詞、動詞、形容詞の類であって、それらの意味するモノゴトは基本的にはその時々の方の違いに影響されない。「犬」はどのような場面に登場しようと犬であるし、「燃える」は常に燃えること以外は意味しない。「赤い」花は緑野に有ろうと荒野に咲こうと常に変わらず赤い花である。つまり、それらは基本的には「本質的命名の語」<sup>58)</sup> である。もちろん、この種の区別を強調しすぎることは問題で、細かく言えばすべてのダイクシスは同時に或る不変の事物の命名であると言えるし、逆に一切の本質的命名の語を、ダイクシスとして用いることも不可能ではない。要するにダイクシスの特徴が際立つのは、言葉の「命名的な働き」ないし「本質を表現する働き」が過度に強調されている存在論的形而上学に由来する世界において、言わばそれに抵抗する性質としてク

ローズアップされる限りのことに過ぎないと言えなくもない。

いずれにしてもダイクシス、或いは「コソアド言葉」には、語や文が自らの内で語や文以外のモノの働きを当てにしているという意味で、自らの限界に臨んでいるということを露わにしてみせる働きがある。例えばココというダイクシス（指標詞）がワカルということは或る特定の限られた舞台において、その場だけに当てはまる可動的で相対的な仕方で指示の指先を援用しながら、アソコを探り、ソコを探り、そしてココを探り当てることが出来るということである。指示の指先の落ち着き所が偶々ココであるにしても、求められればすぐさまアソコでもソコでも「ソコ」と指定して明らかな意識の表に引き出してやることの出来る仕組みになっている。アソコやソコも何時でも引き出せる用意を調えていることなしにココだけがワカッているということはない。アソコやソコへの展開を可能的に含まずにココがココとしてワカルということは「出来ない」。その意味でダイクシス（指標詞）による相対的で一時的な意味決定も、当の指標詞の属しているグループ全体の相対的で一時的な意味決定、ないしは不定形の意味を決定する可能性を含みとしている。<sup>59)</sup>

アソコ、ココ、ソコ、だけでなく、テニヲハなども指標詞的に相互に関連させて理解することが出来る。山「ガ」山とワカルコトは、山ガ地「カラ」天「ニ」向かって聳え、地表に盤石の土台「ヲ」据えているとワカルコトを含み、端的に眼前に登場して来ているのは「山ガ」だけであるとしても、含みとしては可能的なテニヲハの「すべて」を活用したオリエンテーションがすでに成り立っていると見なければならぬ。その成り立ちの下で、或る一つの「山ガ」が「山ガ」としてワカル。山ばかりではない。地も天も地表も土台も、それらのすべてが指標詞のグループの「すべて」を働かせてあらかじめ相対的な意味決定のおこなわれているモノゴトに他ならない。ただし、それぞれのモノゴトがそれぞれのモノゴトとして特定の「,, ガ,, するコト」において登場するためには、相対的で隠れた不定形の「含み」としての意味決定に止まっていて充分であり、またそうであることが必要だからこそ、或る指標詞の可能的なグループが「すべて」を潜称しても敢えて咎められずに済む仕組みなのである。もし、アチコチが同時にワカッているという不定形の「含み」抜きで、ココというワカリを説明しようとしたり、テニヲハの「すべて」を不定形の形で心得ることなしに「,, ハ,, するモノ」がワカルと考えなければならぬとすると、或る種の「病気」を出発点に選ぶ他なくなってしまう。ダイクシス（指標詞）的な語や文の意味が、その語や文の属しているグループの成員の「すべて」において、あらかじめ可能的にそれぞれの意味がワカッていることなしに、いわば孤立して個別的に成立するとしたらそれは病気の場合でしかない。

或る意味では気軽に、語や文の「すべての成員について」などと表現できるのは、問題をダイクシス（指標詞）の使用されるべき場面に限っているからであるとも言える。言い換えれば、或る特定の舞台設定に、語や文の、相対的で一時的な意味決定（ワカルという出来ゴト）の「すべて」を操作する権が委ねられていると想定しているからでもある。もし、語や文の意味がワカルということが、ダイクシス的で相対的な意味決定の仕方によらず、その意味で「主観的」な意味決定の手を離れて、言わば「客観的」に決定されているか、或いは決定されるべきであるならば、或る語や文の意味がワカルということは、むし

ろかえって或る特定の場の内部のみに閉じこめられた形の硬直したワカリとしてしか「出来」しないと考えるを得ないことになるだろう。なぜなら、そのような場合には、或る語や文を理解するために、あらかじめ用意された不定形の「すべて」の力を指先に込めて、ひとつひとつその度毎に場面に応じたワカリ方をあらためて特定し、演出してやる必要がなくなる代わりに、その特定の場に登場してくる一つ一つのモノゴトにもともとすでに個々別々の意味が言わば「客観的」に張り付いていると考える他なくなるからである。これはまさしく語や文が前述のように「命名的な働き」ないし「本質を表現する働き」を勤めている場合であって、例えばベッドという「本質的な名」を持った事物は、その一つ一つが個々別々にベッドという名を持っていて、「ベッド」という音声も文字も同じでありながら、しかも、それでいて「ベッド」という語のすべてがいわば固有名詞なのである。

これでは、しかし、前述の「病氣」と同じことであって、或る一つのベッドを指し示されて、これがベッドだ、と教えられた患者はあらためてまた別のベッドを前にすると戸惑って思案投首になってしまう。ここに成立しているのは客観的な個別性とも言えるべき事態であって、そうした場合には個別的なモノゴトを追ってメカニックに一步一步辿りながら積算してゆくほか不定の、一般的な「すべて」をことごとく回収する道はない。もちろん、このような辿りゆきに終わりは無く、その限り、何時でも誰もが総計に到達するための途上に在らざるを得ない。したがって何時いかなる時においても、目標とする地点まで到達できずに、その都度、或る一つのベッドを前にして首を傾げているほかはない。<sup>60)</sup>

当然のことながらこうした思考の展開もその結末も事実と反する。わたしは一つのベッドを教えてもらうだけで、もう他のベッドを前にして戸惑うことは無くなっている。それでわたしは「すべて」のベッドを「すでに知っている」状態を獲得してしまっている。言い替えれば、道具的な意味で取り替えの利く、不定の、しかし「一般的」なモノ「そのモノ」を活用出来る身分になっているのである。

言い替えれば「病氣」などは例外であって、実際は、どのベッドを前にしてもたじろがないワカリ方がデキルことを説明しようとすれば、算を重ねて「すべて」のモノゴトを経験し尽くすことの出来ない有限な身分でありながら、しかも「すべて」の語や文の意味をすでに知っている、という事態を認めなければならないことになる。モノゴトに張り付いた本質的命名の語を通して、個別的なモノゴトと一步一步メカニックに関わってゆくという見方を維持しながら、しかも、こうした「病氣」を避けようとするための工夫こそ、ワカルという事態の意味を対象措定的に明晰にワカル場合と自明で不定のワカリ方をあらかじめしているという場合の、言わば二段階に分ける方式だと言うことも出来る。対象措定的で積算的なワカリ方の苦手とする「すべて」の了解の方を不定形の一般的自明性に委ねようというのである。

もっともこのような二段階説は指標詞的な語と本質命名的な語とをあまりにも厳しく分けてしまう見方を前提としていて、前述のように語や文のワカリの成立それ自体に「限界」とその踏み越えを認めようとするモノとコトの立場としては、なくもがなの説明の仕方と言えなくはない。言い替えればモノ文の核心にワカラナイモノが顔を出しているという、モノ文の意味の成立の次元に見て取られた「限界とその踏み越え」という現象は、「明確



性—自明性（或いはワカル—デキル）」<sup>61)</sup> という二重構造の円環の中心部に始めから飛び込んで、そうした二段階化の操作を或る意味では和らげてこそ取り出し得るとも言えるからである。

ともあれ、さし当たりここで確認しておくべきことは自らの内部にワカラナイモノが顔を出しているという、モノ文のこうした特質と、そこに「限界とその踏み越え」という意味成立（ワカルコトが出来るモノ、或いはワカルモノが出来るコト）現象を見ておくことは、ただ、証明に関わる自明性のみでなく、自明性問題全般がまさに自明性の問題として成り立ち得るための基本条件を見ておくことにも相当するという事実である。指標詞と本質命名の語とを厳しく分けた上でおこなわれる、明確性—自明性の二段階構造の工夫は厳密に言えばあくまでも印欧語の体制から生まれる問題性に呼応する解明の工夫にすぎない。しかし、すでに述べたことから分かるように本質命名の語と指標詞の組み合わせから出発しておこなわれるこうした説明の仕方はモノとコトの自明性の仕組みがどのような仕方でそれに重なり、また、どのようにそこからズレてゆくかを見定めるための好適な物差しとなるものではある。というよりもモノとコトのワカッている世界を、その「限界」から推し量り、そしてワカリ直すためにこそまさに必要な、言わば「限界に瀕した」説明の仕方ではある。

モノとコトの世界における語や文の「限界的」な性質を、とりわけモノ文のそれを、ハッキリ認めるのに好適な操作として、指標詞という、元来インドヨーロッパ系の言語に由来する文法カテゴリーをモノ文の構造の上に重ねた上で透視してみるという作業の他にも、さらにモノ文やコト文を言わば直接、異言語に衝突させてみるという仕方も有り得る。

ワカルコトを達成するために言葉以外のモノゴトの助けを借りなければならないということが否応なしに露わになるのは異言語同士の衝突の場合だからである。これもまた語や文が或る意味では語や文以外のモノに接する場合であると言えるが、ただし、この場合「語や文以外のモノ」或いは言い替えれば「ワカラナイモノ」として押し出してくるモノは、語や文ならざるモノではなくて、むしろそれ自身「他の語や文」であるところのモノに他ならない。

例えばコソアドのグループと this, it, that, what のグループはそれぞれの意味空間の分割がずれている。もちろん、いずれか一方を他方に還元してしまうことは出来ない。上位の共通な普遍概念に統一を求めることも出来ない。コレとthisに上位の共通の「何であるか (Wasbestimmtheit)」を名付けているオリエンテーション概念を求めるのは難しい。分割されるべき「意味空間」という概念にしてからが、両者のあいだで大きく隔たっていないという保証はない。そもそも普遍的で客観的な概念を自らに即して持たないからこそ、コレもthisもそれぞれ指標詞的に有り得たのである。厳密な意味での共約はもともと不可能にして無意味である。それにも関わらずコレと語るモノ（者）とthisと言うモノ（者）の間に何らかの理解が成り立つと考えるすれば、それは言わば二重化された指差し行為を伴って始めて可能になると考えることにならざるを得ない。すなわち片方の側で語や文に加えて援用された指差し行為の下に登場したモノゴトを、他方が重ねて指差すとするので

ある。もし、現実の知覚の上で「重ねる」ことが出来ない場合には「想像上の」指差しを援用して実際の援用に代えてもよい。

このような説明の仕方は「生きた全体的な活動」としての意味的世界を原子論的に破壊した後で、ぎごちなく再合成するような、無益でメカニクな方途のように見えるかも知れない。或いは「聞いて理解する働き」としての言葉のイメージを「モノを名指す」ところの文法的な言葉のイメージの下に無理矢理組み入れてしまおうとしているように思えるかも知れない。<sup>62)</sup> しかし、実は異言語衝突の場面こそは、こうした類の「ぎごちない説明」がもっとも自然に、そして必然的に、生起する場面なのである。語や文を「聞いて理解」していたモノ（者）が、否応なしに実際に「モノを名指す」ことへと誘い込まれてゆかざるを得ない場面だからである。言い替えれば或る語や文が自らとはまったく異なった語彙や文法システムを持つ異言語の語や文に出会って、想像上にせよ実際上にせよ、言葉以外の事物を援用してワカリアイに到るということも、単に意味の伝達と交流のみに関わる表面的な出来事ではなく、むしろそこにおいて始めて語や文のワカリ「そのモノ」が成立する「踏み越え」という出来ゴトのひとつの典型的な場合だからである。

客観的に言えば異なる言語同士が出会った場合には、すべての語句がいわば指標詞と化する。語や文の外に立つ、毛むくじらの生きモノを指さして「犬」と言いHundと言って初めて、「犬」＝「Hund」という語における等式も成り立ち、普通名詞の意味も確定されるからである。モノそのモノにいわば客観的に張り付いているように解されている一切の「本質的命名の言葉」もこの状況下では指標詞と化してしまう。この場合、異なった言語の使用者達が指さすことによって媒介項として選び出すモノゴトには普通「個別的な事象」という名が与えられている。身体的な条件をも含め、さまざまな事情にしたがって細分されたモノでありコトである。例えば初期の蘭学者達のように異言語の仲を取り持って助けとなるはずの身体的動作同士が大洋と大陸によって遠く隔てられているという事情があれば、直接に指差しているのは語り手の片方だけで、もう片方の語り手は想像上の指差しをしていると拵え設ければよい。想像によるか、実際に指された指を知覚しているか、その違いは重要ではない。けれども、もちろんコトのシミュレートはそれほど単純に完結するわけではない。二つの指先が実際に唯一つのモノゴトの上で重なり合っているように思える場合でも、別の意味での想像的な「思い込み」がやはり働いていると考えざるを得ないからである。

たとえばドイツ人を前にして「大トロ」と発音しながら、魚肉の一片を指さす。ドイツ語は「大トロ、中トロ」などの区別をしないから宙に浮いている「大トロ」という音はこの指差し行為の助けを得て、Fischfleischという語に結びつく。ここに大トロ＝Fischfleischという対訳辞書が出来上がる。しかし、大トロの外延とFischfleischの外延はもちろん違う。してみれば「大トロ＝Fischfleisch」という語の一对が一義的な記号として現実のモノゴトの「何」を表すことは原理的に不可能である。「大トロ」は日本語を知らないドイツ語の語り手にとってはFischfleischを意味する。Fischfleischはドイツ語を知らない日本語の使い手にとっては「大トロ」を意味してしまう。日本語とドイツ語の両方を心得たと任ずる者が有れば、「大トロ」がFischfleischの下位に立ち、Fischfleischが「大ト

ロ」の上位に立つという仕方で両者の概念組織上の接合を試みる。しかし、両者が唯一つの組織立った意味体系の下に組み上げられるということも、もちろん「思い込み」に過ぎない。なぜならFischfleischが「大トロ」の上位に立てるのはFischfleischが「魚の肉」で有る限りでのことであり、そしてFischfleischと「魚の肉」の間に新たな等号関係が成り立つためには、またしても無限回数の指差し行為が実際に完了するか、さもなければそれがすでに完了したモノと「思い込む」かでなければならないからである。<sup>63)</sup> もちろんこうした「思い込み」はその都度の心理現象として現に「心に思い浮かべている」状態である必要はない。指差し行為が完了し、二つの指先が重なり合っているという「思い込み」の次元は現実の知覚の場合にも単なる想像上の場合にも、いずれにせよ不定の「背景」として一般的な形で働いていさえすれば充分だからである。

さて、以上のように、言葉のもとにワカラナイモノが顔を出して来るという場合を指標詞の使用と異言語との衝突を例にとって考察してみると、結局のところ、われわれは本質的な自体性としての規定は持たないながら、しかし相対的な一般者としての機能は有する「同一の場」に引き入れられているということを否定することは出来ない。それは、或る場合には不定な自明の次元であり（印欧語）、そして或る場合にはモノゴト「そのモノ」という同一者（モノとコトの世界の場合）である。もちろん、ここに言う「同一」とは意味論理上の区別立てが出来ない、というほどのネガティブな性格を表すに過ぎない。しかし、例えば特定の地域の親族組織や時間規定のように、他の民族のそれと共通の一般的な概念組織の下にそれらを帰属させ得ると「思い込める」ための積極的な等式が見出せない場合でも、だからと言って「両方の概念組織を心得るコトは出来ない」と断ずることが必然的なわけではない。まったく別の体系にしたがった二つの概念組織を持つこと自体はすこしも不思議なことではないからである。二つの概念組織の間に通約するという可能性が見出せないからと言って、われわれがそこに「ワカルコトそのモノ」を委ねている力の場として、或る意味では積極的な同一性が存在することを否定しなければならないというものでもないからである。モノゴト「そのモノ」を、このような「同一の場」を媒介者として働かせながら、ただしもちろん明確に見定められた上位の一般者としてではなく、しかも決して何らかの本質的命名の下に閉じこめることは出来ないままに、それでいて多様な意味を含みとする隠された次元のモノとして働かせて、異なった言語同士のワカリアイ「そのモノ」も成立してゆくと考えられることにもなるのである。

隠れた「同一の場」に立つこのような「そのモノ」は、述語的な規定性を欠いた究極の基体というよりは、むしろ或る意味では「その場限りの同じ場」としての「そのモノ」にすぎない。そうであるとすればこのような「そのモノ」の働きをさらに解明しようと、現実の、或いは想像上の「指差し」作業同士の重ね合わせる「メタ指差し」とそうしたメタ指差しによって指さされるところの「メタモノゴト」との、共同の働きを想定してみることも出来るかも知れない。指標詞同士を媒介するメタ指標詞の働きとそれに応ずる次元のモノの組み合わせである。

しかし、もしこのように異なった指標的空間や言語体系のワカリ手（語り手）の間にメ

タ指差しの次元が存在することを仮定して、ワカリアイの成立を説明しようと企てるぐらいなら、むしろ、端的にモノゴトの本質規定を「規約」してしまう働きを認めて、メタ指標詞やメタモノゴトなどという別次元の設定を省略することも不可能ではないようにも思える。この時「本質的命名」はモノゴト「そのモノ」に根付いた本質的規定 (Wasbestimmtheit) を聴き取って表す働きではなくて、「仮にモノゴトそのモノの名として規約する」という、言わば仮名 (象) 設定の働きを意味するだけのことになる。

しかし、こうした考えも結局のところ「メタ」の次元を立てるのとそれほど違ったことは出かしていない。両者の違いは「規約する」と表現するか「指さす」と言うかであって、何らかの意味で「あらかじめ」の次元を立てざるを得ないことに変わりはないからである。規約なるものが、指標詞の意味を場面にしたがって特定したり、異なった言語体系に属している別の語や文をひとつに重ね合わせるための個別的な指示の作業に対して、原則として働くような一般的拘束力を持つためには、すくなくとも論理的に「先立って」いるのでなければならないからである。

結局のところ、われわれは異言語に属する語や文のワカリアイという命題に関しても、また指標詞的指示の場面におけるワカリアイに関しても、そこで働いていると考えざるを得ない「そのモノ」という同一者について、数多くの仮説を与えることはできるものの、実質的には二つのモデルしか得ていないように思われる。一つはそれを共通の上位の概念組織が有ると何らかの仕方で「思い込む」ためのより所とすることであり、もう一つは上位の概念組織の存在を当てにせず、むしろ「そのモノ」をモノゴトの直示自体に直接相等関係を打ち立てる「力」と考えてはじめて認めようとする場合である。しかし、モデルは実はもう一つ増やすことも出来て、それが含みとしての概念秩序の相当関係にせよ、モノゴト自体の言わば力ずくの相等関係にせよ、いずれにしろ当の語や文の上、または外に、別位の相等関係を設定することを止めにして、それぞれの語や文を操る場合毎に、その「ワカリ手 (語り手)」が言わば「旅する」のだとイメージすることである。このモデルには何一つ新しい見方は存在せず、ただ前の二つを折衷して語り口を替えたに過ぎないと言えないこともないが、しかし、そこには前述のようにモノとコトの世界に潜む「語や文の限界的な性質」を認知する上で重要な情報も含まれているのである。

旅人説は、或る「ワカリ手 (語り手)」が、或る時は自らの土地を離れて、すでに「本質的命名」を異言語によって受けてしまっているモノゴトの世界を一人訪ね、或る時は逆に異言語の「ワカリ手 (語り手)」がその土地を離れて、もともとのワカリ手 (語り手) の土地の言葉で、すでに「本質的命名」を受けてしまっている世界に孤影、渡来すると考える。いずれにせよ旅人が足を踏み入れる土地は、常にすでに「異言語によって本質的命名を受けている」土地である。それぞれの土地はまさに本質的命名をすでに受けてしまっている土地であって、旅人が仮初めに口を差しはさんですすでにおこなわれている意味決定に攪乱をもたらすことの出来るような土地ではない。旅人は旅人である限りにおいては、その本来の土地から「切り離され」ていて、仮初めの結び付きを持つに過ぎない新たな土地に本質的に関与する権利を与えられてはいないからである。

この比喻で主役をつとめているのはもちろん「土地」のイメージである。ワカリアイが

出来るコト「そのモノ」という、言わば概念的な組立における「そのモノ」の次元に「土地」が顔を出しているのである。土地のイメージはワカリアイが出来るコト「そのモノ」というコトの、或る意味ではリアリティを失った客観的な性格をあらわしているとも言える。ワカリアイが出来るというコトが言わば自分自身を遠避けているのである。言い替えば、土地というイメージにおいて、そもそも「ワカリアイというモノは出来るモノ」というすでに出来上がってしまっている「客観的なワカリアイ」が開けているのである。要するに土地のイメージを通して、ここではコト「そのモノ」とモノ「そのモノ」とが、ひとつに結び合っているのである。「そのモノ」という同一者が二つに分かれて、モノとコトに配られていると言ってもよい。

一般的な「そのモノ」のこうした配分によってまた、ワカリアイが出来るコトという一体性における、ワカリ手というモノ（者）とワカルコト「そのモノ」の分離と接近も生起していると言える。本来の地と異郷とに分かれた「そのモノ」はそこを自由に行き来する旅人を得てはじめて土地で有り得るからである。土地は、すなわちすなわち二つに分かれた「そのモノ」は、遠避けと接近を自らの内に含んだワカルコト「そのモノ」であり、またワカルモノ「そのモノ」でもある。このような「そのモノ」は、ソコで初めてワカリ手がワカルコトを聴き取り、ワカルコトが出来るようになるソコであり、その意味でまたワカリ手がソコに支えられ、また縛り付けられてもいるソコである。そしてこのような「ソコ」への結び付きはまたソコからの遠離りでもあって、その意味で土地に縛り付けられたワカリ手は、また必然的に指標詞を助けて指示する指をあてど無く彷徨わせて「自由に旅する」ワカリ「手」でもあることになる。

ワカリ手は前述のように土地のワカリ手と余所のワカリ手に区別される。すなわち土地によって本質的な命名を受けているモノゴトを正しくワカルコトの出来るモノ（者）とそうしたモノゴトのワカラナイモノ（者）とに分けられる。落ち着きの無さを振り払うための犠牲をワカリ手の側にだけ求めれば、旅人のイメージが完成するというわけではない。土地そのモノの側も二分されなければならない。本来の土地と余所の土地。故郷と異境。土地の側にもこうした分裂の犠牲を払わせてはじめて、異国の地を踏み、異なった言葉を聞くという旅のイメージが、ワカリアイが出来るというモノとコト「そのモノ」を表示し得ることになる。それは多くの異なった土地を多くの異なったワカリ手が相互に自由に移動しあい、土地「そのモノ」に根付いた本質的な命名の言葉を聴き取る「本当のワカリ」と、単なる行きずりのモノ（者）の持ち込む「仮初めのワカリ」を、言わば交替に担い合うことにして、「そのモノ」という「その場限りの一般者」の自己矛盾的な在り様に対処しようとしているわけである。ワカリ手と土地の関わりを常にすでに本質的な命名の関わりとは解さない。さりとてワカリ手と土地の関わりを常にすでに仮初めの規約的な関わりであるとも考えない。或る場合には本質的に関わり、或る場合には仮初めに関わる、という交替のないし交錯的な在り方こそ「本質的」ではないかと提案しているわけである。<sup>64)</sup>

このイメージにおいては、ワカルコトの全体が、ワカルコト「そのモノ」と、ワカリ手（語り手）すなわちワカリ（語り）つつあるモノ（者）と、ワカルコトの登場して来る土地（ワカルモノ「そのモノ」）とに三分されていて、その三者の間には相互に不可欠の依

存関係とその条件下での独立性が認められていて、それなりに自由な置き換えが可能である。ワカリアウコト「そのモノ」が「出来る」ために共通の場として開けているのがすでにワカッテイルコト「そのモノ」として与えられている「土地」であり、それは「そのモノ」として共通の場であればこそ開けた土地でなければならない。異なったモノゴトのワカリ手が自由に足を踏み入れることの出来る一般的な「そのモノ」でなければならない。しかし、またそれは共通の場であるというまさにそのおなじ理由によって「土地の言葉」のワカラナイモノ（者）を受け入れることの出来るモノでもなければならない。言い替えれば、或る種のワカリ手を、すでに成り立っている一般的な「そのモノ」を受け入れている「土地のワカリ手」から切り離し、それを端的に「言葉のワカラナイモノ（者）」として排除し、閉め出してしまうという形で開けているのでなければならない。土地が自由な通行を許し、その意味で共通の場で有り続けながら、しかも「異なったモノゴトのワカリ手（語り手）」を受け入れ得るとすれば、それは土地のモノゴトから切り離されて宙に浮いた、仮初めのワカリを持つモノ（者）としてである他はない。土地において本質的に命名されたモノゴトを聴き取る、本来のワカリを実現したモノ（者）であるとの潜称を許すことは出来ないからである。その意味で、この比喻における土地の役割は、ワカリアイという出来ゴトを可能ならしめる共通の「同一の場」、言い替えればワカリアウコト「そのモノ」が、「多数の同一の場」ないし「個別的な普遍性」とも言うべきいう自己矛盾的な性質を担っていなければならないことを提示し、しかも同時にそのような矛盾を回避する処理の可能性を示すところにあるとも言えるであろう。

ワカルコトの生い立つ「土地」とそこにおける自由な移動というイメージに即して読み取られ得る、この二義的で自己矛盾的なワカルコト「そのモノ」こそ、まさにわれわれが「限界とその踏み越え」と呼んで、モノ文の核心に認めて来たモノに他ならないことは言うまでもない。前述のように、われわれはここで、コト文「そのモノ」とモノ文「そのモノ」とがひとつに結び合った地点を見ていることになるわけである。一義的な記号の体系を生み出すためには、こうした自己矛盾的なワカルコト「そのモノ」などは退けなければならない。しかし、それを退けて手に入るのは規約された限りでの一義的記号の体系ではない。モノ文のモノ文としての「そのモノ」ではない。さりとて、このような自己矛盾的なワカルコト「そのモノ」をそのままに抱え込めば、限界「そのモノ」が端的にワカラナイモノとして顔を出し続けてしまうのである。

この時、モノ文は、本来的なワカリを次々に交替しながら担ってゆくという旅人の立場をとり、言わば「ワカリの旅」という形式を工夫して、自己矛盾に崩れてしまうことのないよう自らを補強しながら、ワカリアウコト「そのモノ」をモノ文「そのモノ」として、交替的に「繰り返して」ゆくという、ひとつの道を示しているのである。

最後の章でわれわれはこのいささか奇矯な「説明」の「非神話化」を取えて試み、その成果を携えて、モノとコトの世界における証明作業の意味を問う当初の設問に立ち返ることにしよう。

## (三) モノ文の補強はどのような仕方でおこなわれるか

コト文の意味、すなわち「,, ガ,, する」とワカルコトはとりわけ「,, ガ,, コト」という形において「登場」性格を持つと言っておいた。言い替えればコト文の意味はまさに「アラワレル」という積極的なコトとして成り立っている。これに対して「,, ハ,, するモノ」という基本形式にしたがうモノ文は「,, ハ,, モノ」の「退場」性格のゆえに自らの有する意味を自ら消滅させながら提示するような自己矛盾的性格を持っている。「ハ」も「モノ」もいずれも何らかの意味で否定的で無的な色合いを持つときに始めて「文法的」に用いることが出来ることは、すでに繰り返し指摘したところである。<sup>65)</sup>「椋鳥がさえずるコト(!)」という眼前描写の意味鮮やかさに引き比べ、「椋鳥ハさえずるモノ」という判断が「静かな」性格を持つことなどもすでにその例にあたる。「,, ハ,, するモノ」は見かけ上の押しの太さにも関わらず、「アラワレ出る意味」という観点からすれば、むしろ逆に「消え入るような意味」を抱え込んでいるとさえ言えることになるのである。もちろん、モノ文も形の上では「,, ハ,, するモノとワカルコト」というように、コト文同様、「ワカルコト」の積極性を強調することは出来る。ところがその内実が「,, ハ,, モノ」であるとなると、「コト」としての積極的な意味成立も「男ハ浮気をするモノとワカッタ」のように、言わば受動的で、或る意味では否定を含んだ「思い知らされるコト」としてのワカルコト(意味)と化してしまうのである。

しかし、このように受動性と否定性を含んでいるとは言え、それでもやはり、何らかのワカリ(意味)をそれなりの積極性において提示しているのがモノ文であると考えれば、そこでは何らかの形で自らの消滅傾向に抵抗し、自ずと崩壊に到る自己矛盾から自らを救い出す方途が講じられている筈であろうという見通しも生まれてくる。モノとコトの世界における「証明」の在り方をめぐるわれわれの問いも、まさにこの点に向かうことによって解明の手掛かりが得られると考えられたのであった。

ワカルコトとワカルモノの、言い替えれば「アラワレ出る意味」と「消え入りゆく意味」の、調整の仕組みについて前章までに示された考えは結局、次のように取りまとめることが出来る。

すなわち、モノ文の意味はコト文の意味「そのモノ」で有る。そしてまたモノ文の意味の「そのモノ」こそ、コト文に他ならない。すなわちモノ文とコト文とは「そのモノ」を介して、それも言わば二分された「そのモノ」を介して円環的に結び合っている。「,, ガ,, ワカルコトそのモノ」と、端的に「,, ガ,, ワカルコト」とはおなじコトではない。前者は「,, ガ,, ワカルコト」が「,, ガ,, ワカルコト」に向かう再帰的な動きをあらわしている。そして「,, ハ,, するモノ」も「,, ハ,, するモノそのモノ」と同じモノではない。後者は端的なコト文へと立ち返りつつあるモノだからである。しかも、その場合、それぞれの方向付けは「ソノ」という、或る意味では個体化であり、或る意味では疎遠化でもあるような、指標的手続きを介しておこなわれている。コト文がこうした手続きを通して自らを個体化するとき、コト文は同時に自らを疎遠化し、遠避けてもいることになる。言い替えれば、コト文という積極的に「成立」しつつある意味が、逆に消極

的に「解消」しつつある意味へと変貌を遂げているのである。椋鳥がさえずるコト！というような端的に「登場」する意味も、椋鳥がさえずるコト「そのモノ」と付け足せば、「名辞化」ないしは「実体化」が生じて、その顕わな感動も減圧され幾らかよそよそしく遠避けられることになる。つまり、登場する意味現象としてはむしろ逆方向に向きを変えてしまう。言わば退場し、消滅していつてしまう。そしてこのように「そのモノ」を付され、その限りにおいて自己矛盾的となったコト文こそ、すなわちモノ文に他ならない。要するにモノ文とはコト文「そのモノ」である。自分自身に向かうコト文が、すなわちモノ文なのである。その意味でモノ文とはまさにコト文「そのモノ」における「コト」への否定傾向である。コト「自ら」の破壊傾向なのである。したがって逆にこのように破壊的、消滅的でない、敢えて言えばむしろ建設的で生成的な傾向は、まさにコト文におけるコトのモトモトの建設傾向に立ち戻り、モトモトのコトを「当てに」しさえすればよいことになる。建設傾向「そのモノ」ではない。そうではなくて「そのモノ」を欠いたモトモトの単なる「コト」こそ、モノ文を補強できる唯一の力なのである。それがすなわちモノ文「そのモノ」の持つ、コトへの還帰傾向なのである。椋鳥はさえずるモノ、というモノ文は、椋鳥がさえずるコト（！）のリアリティを言わば破壊している。或いはそのようなリアリティなどに実は関心を払っていない。ともかく「そういうモノ」と決め付けている。だからこのようなモノ文に対して、その「破壊」傾向を押し止め、その無関心を覚ましてやるためには「現にさえずる椋鳥」を突きつけてやればよいのである。つまり「椋鳥がさえずるコト（！）」を「モトモトさえずるコト」として眼前描写してやりさえすればよいのである。単純にそうすることがかえってモノ文の「破壊、消滅傾向」には歯止めを掛け、それがコトへと還帰することにもなるわけである。

したがって、こうした円環構造はモノ文にとってもコト文にとってもまさに両義的である。モノ文は何はともあれ決め付けていさえすればそれでよい。ワカロウがワカルマイがそのようなモノだ、と決め付けておきさえすればそれでよかったのである。それをあらためてワカルコトのリアリティに近づけ直してやるのはよい。そうすることで「,, , モノだ」という、言わば無内容なワカリにも、コトらしいリアリティが与えられるからである。「,, , モノだ」という力ずくの決め付けもワカッタ上で納得されることになる筈だからである。しかし、見やすいように、このように自らの力をコト文に支えてもらうことはまた、モノ文である限りでのモノ文へのコト文のリアリティを無視した展開をコト文の方から引き留める反逆の動きでもあって、何ゴトもワカルコトとしてでなければ納得せず、如何なる「,, , モノだ」にも反抗する危険な火種としての「モトモトのコト」をモノ文自らあらためて抱え込むことにもなってしまうからである。<sup>66)</sup>

和算の帰納法は「,, , 四の乗数に近いコト」「ますます四の乗数に近いコト」「さらに四の乗数に近いコト」と「繰り返し言ってやるコト」によって「ひとつの究極的な四のn乗に近づくコト」を提示する。言い替えれば一連の「四の乗数に近いコト」を通して「ますます四の乗数に近いコト」が透かし見通され、そしてそれが究極的には「四のn乗に近づくコトそのモノ」として獲得される。すなわちそこでは言わば個体化された「四のn乗に近づくコト」が示めされようとしている。それが極限值というモノである。この時「極限



値としての四の $n$ 乗」などという形で、リアルなワカルコトから遠離りつつあるモノに、あらためてワカルコトとしてのリアリティを与え直してやるという「危険」な機能を果たしているのが、数多く並べられた「四の乗数に近いコト」である。

極限值を四の $n$ 乗であると断定することに演繹的な意味での合理的根拠はない。しかし、この一連の手続きは合理的な正当化の根拠がないのに一連のデータから一定の値を単に帰納している、と言うよりはむしろ、或る意味では個体的な「モノ」として直観され、また、「モノ」としてしか直観されていない極限值に、コトとしてのリアリティを与え返しているものである。そうするコトでモノの持つ消滅傾向に抵抗しようとしているのである。並べられたデータの方から極限值をうかがい見れば、それを数値の一定のタイプとして確定する合理的根拠は見当たらない。その意味でここでおこなわれていることが帰納的推論に過ぎないことに疑いはない。しかし、帰納的推論のプロセスにおいて活用された一連のデータも、帰納の作業が終わり、数値の一定のタイプが「発見」された後になって振り返れば、ただの事実的なデータの集まりではない。それはむしろ「モノ」としての極限値の消滅傾向を押し止めて、「コト」としての積極的なワカりをそこに注ぎ込む「モトモトのコト」というモノ文的な思い当たりとしてのワカりの意味を与えられたコトの集まりなのである。その意味でここでおこなわれている一連の数値解の羅列作業は敢えて言えばむしろ分析的なものである。すなわち、それは極限值四の $n$ 乗というモノをよくワカル（分かる）ようにし、そこに「モトモト」の形で含まれている四の $n$ 乗のワカリ（分かり）を、あらためて展開するコトによって、極限值四の $n$ 乗「そのモノ」の存在を支えようとしているわけだからである。

帰納法を評価するのに演繹的真理を基準にしたからと言って必ずしも不当ではない。モノとコトの立場から言えばそれも或る意味では当然のことに過ぎない。帰納的な推論に馴染むのは、もちろんモノ文の方であるが、そのモノ文が実は「モトモト」コト文「そのモノ」だからである。演繹的推論の出発点にふさわしい、意味の直接的でリアルなワカリ「そのモノ」だからである。そうである以上、コト文の立場から言えば、コト文「そのモノ」らしい本来の積極的意味成立性を示せと、モノ文に対して要求する権利が与えられていると言ってもよい筈だからである。

同様の仕方での補強の仕組みは原理や法則をあらわすモノ文の場合ばかりでなく、倫理的であれ、習俗的であれ、何らかの命法として機能するモノ文の場合にも認められる。「女は二十五歳にもなれば結婚するモノ」はモノの命法的機能を活用している。この場合、二十五歳を過ぎた女性が結婚している実例を幾ら集めてみたところで、この命法を根拠付けたことにはならない。逆に結婚していない例を探してみてもおなじことにすぎない。モノ文を支えようとして提示されたモノが単に個別的な事例としてのモノの積み重ねであっては、モノ文の消滅傾向を喰い止めることは出来ないというのがその理由である。モノ文の消滅傾向が食い止められ、こうした命法が「根拠付けられる」とすれば、それは集められたおなじ実例がまさに「女性が二十五歳ともなれば結婚するコト」としてリアルにあらわれて来る場合なのである。コトとしてモノ文のワカりを満たして来る場合なのである。このようなコトであって初めて、命法としてのモノを支える「意味のあるコト」であり、

命法としてのモノ文にワカリ（分かり）を与え、命法としての力を発揮させる「モトモトの」コトなのである。つまり、この場合にもコト「そのモノ」の意味はいわば分析的に強化されていると言えることになるのである。<sup>67)</sup>

「,,, ガ,,, するコト」に付された「そのモノ」はワカリ自身への反照的な方向を示していた。してみればその時「,,, ガ,,, するコト」は反照の歩みにとって「モトモト」という位置に立たされることになっていたのである。つまり、「,,, ガ,,, するコトそのモノ」という言わば新たに獲得された「そのモノ」の次元から振り返るならば、「疎遠化され」或いは「実体化」された「そのモノ」ならぬ、端的な「,,, ガ,,, するコト」は「モトモトの（本来の）コト」である。反照の出発点たるワカリこそ「モトモトのワカリ」なのであった。この意味ではモノ文とコト文という形式の内に、自らの世界の全体を言い尽くそうとする立場はまた全体を「モトモトの（本来の）」部分と「モトモトでない」部分とに分けて構造化しようとしている世界でもあることになる。モノとコトの世界がコト文とモノ文によって言いあらわされ、基本的にはこの形式において言い尽くされるとすれば、コト文とモノ文が「そのモノ」を介して、こうした「モトモトのワカリ」を介して、ひとつに結び付くという仕組みこそ、モノとコトの意味消滅と意味成立とを、ひとつにまとめた全体的世界として言いあらわしているのである。

結局のところ、こうした形での分離と結合のオリエンテーションは「コソアド言葉」を通して言葉になっている。そしてワカリがもともと「判り」と「分かり」を含んだ二重性である限り、ワカリ「そのモノ」に反照的方向性が指示されているとしても、それはコト文をいわば外部から受け止めて理解しようとしている限りでの語り手や聴き手に向けられた指示ではない。語り手も聴き手も「判り」と「分かり」をともに備えたワカリとして有るコト「そのモノ」の内部に「モトモトすでに」という形で含まれているという仕組みを与えられている。この意味においては「そのモノ」という語もコト文の捉え方の変化を指示していると言うよりは、コト文（コト）に対してその「モトモト」に「新たに立ち返る」よう、いわばコト文（コト）に姿勢の変化を求めたものと言えることになろう。

もちろん、コトのこうした姿勢変更はコトを反照的に回転させるという方向転換の出来事とだけ言って済ませられるものではない。この出来ゴトは具体的には、コト文（コト）を支えるモノの次元を「ソノ」という個別化されたダイクシスの圏内に取り納めることを意味している。そこに成立する「自体性」としての「そのモノ」は、具体的な経験の場における「コレ」「ソレ」「アレ」「ドレ」など、その時々指標的意味空間の配置に呼応する、敢えて言うならば「主観的」で個別的な「自体」性に他ならない。主観的、という表現は厳密に言えば当たらない。強いて「主観的」の語に何ごとかを語らせたければ「間—主観的」な意味での「自体性」であると言っておく方がよいかも知れない。要するにここに成立している自体性は「コレ」「アレ」「ドレ」などの相関者である限りでの「ソレ」の支配下に立つ何モノかだということである。このような意味で「間—主観的」な「そのモノ」は、それがさらに高度な抽象化を受けて、いわゆる「悟性的対象」として一般化され、人から人へと手渡されるべき知的所有物として「確定」され、いわば不動の形而上学的実

体に化したとしても、だからと言ってそのモトモトの自体性性格「そのモノ」までも失ってしまうわけではない。そうしたモトモトの次元への暗黙の結び付きによってのみ、それらの悟性対象も無意味なモノではなく、まさにワカルーモノで有り得るからである。すなわちワカルコトのリアリティの直接的な次元に踏み止まったままではないにしろ、すくなくとも「そのモノ」という自体性による疎遠化を介して、モトモトはワカルコトであった筈、という意味を与えられるようになっていくからである。この意味においては「悟性対象」といっても「ソノ」という指標詞によって画定される意味空間から抜け出し切ってしまうわけではない。否、むしろ正確に言えば、そこから抜け出し切っていればこそ、そこを「モトモトの場所」としていないわけにはいかないのである。「自由変更」<sup>68)</sup>という操作を想定せざるを得ない極めて高度の抽象化も以上の意味では「間—主観性」を保ったままで、間—主観的なワカリの次元に立ちながらの作業である。ハイデッガーが『存在と時間』において道具存在性を事物の或る意味での「An-sich (自体)」であると言ったのも、同じ事態がいわば向きを変えて自ずと語り出ているとも言えるであろう。いわゆる「自体」は実は道具存在性の許にある。言い替えれば指標詞的で具体的な指示のオリエンテーションにしたがっている。しかし、それはまさしくひとつの「自体」として、そうなのである。<sup>69)</sup>したがって端的なコト文に、以上のような意味での「自体」が、すなわち「そのモノ」が加わるということは、もともとコト文に対して言わば、それを支える個別的自体性の次元が指標的オリエンテーションに導かれながら開けてくることに他ならないと言える。そしてそこに開かれるのがコソアド言葉にしたがう指標の場である限り、そこで同時に予定されているのは、語り手、聴き手、それ以外のモノ（者）、或いはモノゴト（事物）などの別にしたがってそれぞれの支配領域の割り当てられる自体的空間の開かれることでもある。

こうした自体的空間に属するモノのひとつとして、コト文の「そのモノ」も、モノ文の「そのモノ」も、ココ、ソコ、アソコ、ドコによって張り巡らされた領域の内のソコに属している。アソコに属しているわけではない。ココに属しているわけでもない。まさに「ソコ」に属している。

このようなコソアドの仕組みの下で、情報の伝達なる作業がもしも有り得るとすれば、言い換えれば、直接的な現場を超えて広く波及し、一般化されるべきワカリが有り得るとすれば、それはむしろココとアソコの間において成り立つ何ゴトかである他はない。それはココとソコの間成り立つ何ゴトかではないのである。なぜならこの仕組みのもとでは、そもそも伝達されるべきワカリが有るとしても、それはソコなる「ソノもの」との共働作業において初めて成立するモノだからである。言い替えればワカリアイなるものは、むしろもともと「そのモノ」として成り立っている意味空間からワカレて、ココとソコとに配置されているモノだからである。その意味で、ソコとは原理的にはソコに対してことあらためて伝達作業をおこなう必要のない場所だからである。<sup>70)</sup> こうした意味空間の内、ワカリの伝達（トランスポート）というようなことが必要となり、また可能にもなるのは、むしろココとアソコの間、ソコとアソコの間においてなのである。アソコなる「アノもの」は、ココにおいて成り立つワカリ「そのモノ」の成立に関わっていない、という形ではじ

めてココに関わり込んできているに過ぎないモノだからである。

ココを自らの領域として支配しているモノ（者）はワカリ手（話者）である。話者とはココに顔を出すモノ（者）である。他方、ソコは話者の手から遠いものの、しかし「聴き手」の立場からは近い場所を指している。話者と聴き手は互いに重なり合い、互いに指標の指を指し合って、ココとソコをひとつにまとめあげている。すなわち「ココそのモノ」という「共通の場」としていると言ってよい。それは「旅人」であれ「土地の住人」であれ同じことである。しかし、話者と聴き手の双方に手の届かない場所が開かれると、それがアソコである。

ソコが話者によって承認された聴き手の支配領域であったり、或いは話者と聴き手の双方によって承認された中間的共通支配領域であったりするのに引き比べ、アソコとは話者と聴き手の双方によって承認され、双方から言わば等距離の「遠く」に位置するところの、或る意味では話者の手にも聴き手の手にも負えない非支配的な領域に他ならない。

聴き手がソコに待ち構えている限りにおいて、ソコに聴き手が属するのであって、聴き手がソコを離れて、むしろココを占領してしまえば、ソコには誰も居なくなる。ソコはもはやアソコにすぎない。端的なアソコには誰も聴いているモノ（者）が居ない。もちろん誰もいないわけではない。多くのモノ達がアソコにも居る。しかし、ココで語られている事柄に耳を傾けているモノは居ない。それがアソコであるというコトの意味なのである。ココから話し声の聞こえる範囲にいるか居ないかではない。物理的空間は如何に近くとも話者と聴き手の双方からの等距離にあつて、しかも如何なる聴き耳もそれに属していなければ、ソコはアソコである。

いずれにせよわれわれはここで三種のモノ（者）を得たと言ってよく、ココのモノ（話者）、ソコのモノ（聴き手）、そしてアソコのモノ（有らぬ方を向いている者）である。ドコかのモノ（誰か）を加えて四種と言ってもよい。ココに属するこのモノは普通、ワタシと呼ぶことになっている。ワタシとはココのモノである。ソコに属するモノはソナタであり、ソコモトであり、すこし敬遠すれば「キミ」であり「アナタ」である。要するにワタシと君とはココとソコとにそれぞれの場を開きつつ、ココのモノ（者）、ソコのモノ（者）として向かいあったり、共同したりしながら、アソコのモノ（者）を気にかけているという在り方をしている。そしてワカルコトの「そのモノ」とはまさにこうした意味空間の抱え込む個体的な自体性としてその時々「ソコ」から働きかけてくる分裂を含んだ「そのモノ」なのである。

## 結語

自明性を限る四本の柱の内「証明抜きで,,,」という意味でのそれを考えようとしたのが本稿の歩みであった。「証明抜きで,,,」という表現はもともととは演繹的推論の頭初に立つ公理的命題に与えられたところの性格を言ったつもりであった。すなわち一般に公理なるものが、それ自身については如何なる演繹的な正当化の責務も免れているという性質である。しかし、自明性問題全般を西洋近代哲学的含みだけでなく、さらに広い思考の場に引き据えてみると「証明抜きで,,,」という性質をめぐる問題の取り扱いも自ずと拡がっ

てくる。本稿はモノとコトの世界における証明の在り方を問うという形でこの問題に接近しようとしたわけである。つまり、モノとコトの世界では演繹的推論の場合に限らず、およそ一般に「証明」なるものにそれ独自の関わり方があって、それがこの世界に固有のモノゴトの自明の取り扱い方を特徴付けているように思えたからである。その仕組みを明らかにするために本稿が手掛かりとしたのは、まず、モノとコトの世界を表現するためのもっとも基本的な手続きとして、コト文とモノ文という二つの文型式を取りだし、両者の関係をモノ文がコト文の「そのモノ」をなし、コト文がモノ文の「そのモノ」をなす円環的な形として認めることであった。その上でこの世界における学術的命題（すなわちモノ文）の「基礎付け」が、モノ文をコト文に分解するという形でおこなわれ、その意味で実は「そのモノ」という「一般者」を前提する「分析的」な作業を意味していると解したのである。つまり、モノとコトの世界における学術的命題の特質を基本的には単なる事実の羅列ないし帰納的なものと見るのではなく、むしろ、逆に、そこに潜む「分析的」な性格から見てゆこうということである。

こうした性格付けは印欧語の下における学術的一般命題のむしろかえって「指示的」な性格と対照を成している。<sup>71)</sup> 本稿ではさらにこうした「一般者」としての「そのモノ」がワタシ、キミ、カレ、などの指標的意味空間を通して開けていると考えている。しかし、このように言わば一般的「そのモノ」と個別的「そのモノ（自と他）」の総合という観点から、モノ文の意味成立をさらに詳しく考えることについては示唆に止めた。その一端はすでに拙稿「モノとコトの自明性」において述べてあるが詳細は次稿以下に譲る。<sup>72)</sup>

## 注

はじめに

- 1) 東京水産大学論集, 第30号, 1995
- 2) 東京水産大学論集, 第31号, 1996
- 3) 東京水産大学論集, 第32号, 1997
- 4) 東京水産大学論集, 第33号, 1998
- 5) デカルトのコギトを日本語では普通、意識の直証的事実(コト)と受け取っている。いずれにせよ「そのモノ」としてのワタシやキミ、カレなどの生と死の問題については拙稿「モノとコトの自明性」においても若干言及しておいたが詳しくは別稿を用意しているので本稿では扱わない。ただ最終章でダイクシスに関連する限りにおいてわずかに触れておくに止める。後述の「次元」についても同様である。
- 6) E. Husserl, *Erfahrung und Urteil*, Felix Meiner Verlag, Hamburg, 1972, S.87
- 7) 例えばハイデッガーにおける同趣旨の用法。M. Heidegger, *Sein und Zeit*, (Max Niemeyer Verlag, Tübingen, 1963) S.23 など。
- 8) 前掲拙稿「自明性という手掛かりについての予備的考察」(東京水産大学論集, 第30号, 1995) 91頁以下。
- 9) M. Heidegger, *Sein und Zeit*, Max Niemeyer Verlag, Tübingen, 1963, S.162
- 10) 前掲拙稿「明るさとしての暗さ」(東京水産大学論集, 第33号, 1998) 73頁
- 11) Heidegger, a.a.O., S.30
- 12) 伊東俊太郎『ギリシア人の数学』(講談社学術文庫, 1990年) 161頁
- 13) 同上, 162頁

## 自明性と証明

- 14) 前掲拙稿「自明性という手掛かりについての予備的考察」(東京水産大学論集, 第30号, 1995) 90頁
- 15) 西田幾多郎『哲学の根本問題, 二, 私と世界』全集, 第七卷(岩波書店, 昭和40年) 91頁
- 16) 井筒俊彦『意識と本質』(岩波書店, 1991年) 37頁
- 17) I. Kant, Kritik der reinen Vernunft, herausgegeben von Ingeborg Heidemann, Philipp Reclam jun. Stuttgart, 1966, S.229 ff.
- 18) E.Husserl, a.a.O. S.124
- 19) 前掲拙稿「モノとコトの自明性」(東京水産大学論集, 第31号, 1996) 104頁
- 20) M. Heidegger, Was ist Metaphysik? Gesamtausgabe, Bd.9, Vittorio Klostermann, 1976, S.112
- 21) E.Husserl, Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie, HUSSERIANA, Bd.VI, Haag, 1962, S.275,

(一) モノコトの世界における証明は何を狙いとしているか.

- 22) 塵劫は塵点劫の略. 塵は微細・無数, 劫は無限の長時間, したがって塵劫とは無量の長時間のこと. (中村元『仏教語大辞典』東京書籍, 平成三年刊) 上巻, 799頁参照
- 23) 勝見英一郎・校注『塵劫記』江戸初期和算選書第一巻③(研成社, 1990) 38頁
- 24) 同上, 3頁
- 25) 小川東「建部賢弘の数学における証明とはなにか」1998, 日本科学史学会発表, <http://www.tcp-ip.or.jp/~lachesis/a1-9805.html>
- 26) 同上,
- 27) 『地球日本史』産経新聞社, 1999年刊行予定.
- 28) 渡辺二郎『ニヒリズム』(東京大学出版会, 1975) 259頁
- 29) 同上, 227頁
- 30) 和算家達は掲額という手段を通して設問と回答の交換をしたことが知られている.
- 31) 拙稿「日常における自然」(哲学雑誌, 第761号, 1974) 137頁
- 32) 前掲渡辺『ニヒリズム』254頁
- 33) 前掲拙稿「日常における自然」138頁
- 34) 『落窪物語』巻の三(日本古典文学大系13, 岩波書店) 176頁,
- 35) 今西裕一郎校注『蜻蛉日記』(岩波文庫, 1996年) 38頁
- 36) 本居宣長『くずばな上つ巻』(本居宣長全集, 第十三冊, 岩波書店, 昭和十九年) 175頁
- 37) 同上,
- 38) 三尾砂『国語法文章論』(三省堂, 昭和23年, 服部四郎他編『日本の言語学』大修館書店, 1979年, 所収) 370頁,
- 39) 同様の趣旨で「ガ文」を取り扱った思索として, 大橋良介『悲の現象論序説』1998, 創文社,) を挙げることが出来る. 同書, 44頁以下を参照.
- 40) ジュリア・クリステヴァ『記号の生成論—セメイオティケ2』(中沢新一他訳, せりか書房, 1994年)
- 41) E. Husserl, Erfahrung und Urteil, Felix Meiner Verlag, Hamburg, 1972, S.12
- 42) 三上章『続・現代語法序説』(くろしお出版 1976) 60頁
- 43) 西田幾多郎『哲学の根本問題, 総説』全集, 第七卷(岩波書店, 昭和40年) 186頁
- 44) 「,,ハ」も, モノと結び付いて, 或る意味ではタウマゼインの場を開く機能を有する. タウマゼイン性格に通うのは必ずしも「,,ガ」の方ばかりではない. この点についての両者の関わりは(二)で触れた「諦念」ともからめて, いずれ稿を改めて詳論する予定である.
- 45) 松下大三郎「題目語」(前掲『日本の言語学』所収) 554頁
- 46) Husserl, a.a.O. S.87
- 47) コトの棚上げ機能についてはそのタウマゼイン機能とも合わせて別の機会に詳論する予定である.
- 48) 西田幾多郎『無の自覚的限定』全集, 第六卷(岩波書店, 昭和40年) 168頁
- 49) 前掲三尾, 366頁

- 50) Husserl, a.a.O. S.282 ff.
- 51) 池上嘉彦『「する」と「なる」の言語学』255 頁
- 52) 前掲拙稿「明るさとしての暗さ」(東京水産大学論集, 第 33 号, 1998) 67 頁以下参照
- 53) 同上, 71 頁

(二) コト文「そのモノ」とモノ文「そのモノ」について

- 54) 拙稿「行為について」(上原行雄・長尾竜一編『自由と規範』東京大学出版会, 1985 年 所収)
- 55) 前掲拙稿「モノとコトの自明性」(東京水産大学論集, 第 31 号, 1996) 122 頁
- 56) Husserl, a.a.O. S.124
- 57) 前掲拙稿「モノとコトの自明性」(東京水産大学論集, 第 31 号, 1996) 107 頁
- 58) Karl Bühler, Sprachtheorie, Die Darstellungsfunktion der Sprache (Verlag von Gustav Fischer in Jena, 1934) 特にIIIを参照.
- 59) Jerry Fodor and Ernest Lepore, Holism: A Shopper's Guide, Basil Blackwell, 1992 (邦訳 柴田正良『意味の全体論』産業図書株式会社, 1997) この書は経験主義的な思考の限界の内に於いてではあるが, 文脈に依存した意味の全体説の種々層を展望したうへ, どちらかと言えば否定的な結論を導きだして, そうした思考態度から出発した場合に到達する, 或る意味ではもっとも合理的な結論に達している.
- 60) 湯浅泰雄『身体論』(講談社学術文庫, 1993 年) 他参照.
- 61) 前掲拙稿「自明性という手掛かりについての予備的考察」(東京水産大学論集, 第 30 号, 1995) 80 頁
- 62) 清水哲郎『オッカムの言語哲学』(勁草書房, 1990) 34 頁以下参照
- 63) 由来も結論もかなり相違するものの, 或る時点で同種の問題に言わば袖すり合うような議論としてクワインの「場面文の根底的翻訳」の論を挙げることが出来るであろう. (W・V・O・クワイン著, 大出晃・宮舘恵訳『ことばと対象』勁草書房, 1997 年, 特にその第二章を参照)
- 64) 拙稿「アルということ (二)」(東京水産大学論集, 第 28 号, 1993) 99 頁も参照. 「交錯」という概念についてやや立ち入った検討をしておいた.

(三) モノ文の補強はどのようにおこなわれるか

- 65) モノの無的性については拙稿「モノとコトの自明性」或いは「明るさとしての暗さ」その他においてしばしば言及しておいた.
- 66) 「モトモト」ということと時間性の関係は多くの論じるべきものを含むが別の機会に詳論の予定である. 本稿では敢えてこれ以上には涉らない.
- 67) 道元の「莫作の力量見成するゆえに」などと言う語もおなじ趣旨に解することが出来よう. 「悪を作すなかれ (悪事は働かないモノ)」と言うモノ的な命法の意味消滅性を「為すなかれガもとから登場するコト」というコトの意味充実を以て補強しようとしていると位置付けることが出来るのである. 水野弥穂子校注『正法眼蔵』(二) 岩波文庫, 1992 年, 233 頁, 参照
- 68) Husserl, a.a.O. S.410
- 69) M.Heidegger, Sein und Zeit, Max Niemeyer Verlag, Tübingen, 1963, S.74
- 70) ハイデッガーが意味の相互理解を情報の単なるトランスポート現象と考えまいと主張したのも, 理解の, その成り立ちそのモノからしての, 或る意味での普遍性を前提していたからである. 前注<sup>9)</sup>参照

結語

- 71) このような性格については拙稿「アルということ (一)」(東京水産大学論集, 第 27 号, 1992 年) でいささか検討した.
- 72) この点についての委細は拙著『テニヲハの神学』に詳論する予定である.